川柳の雑誌

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

麻生路郎☆主宰

電話廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿六年四月一日發行第六千第四號
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通巻二百八十七号

No. 287

四月号

二つの話題

矢は放たれた

「週刊朝日」に川柳のワルクチが載っている　作品に対しての文学的な批評なら、それが

と云うので見せてもらつた。なるほど、ワルクチと云えば云えないこともないが、東京あたりの柳人には相当に手痛いお灸ででもあつた。

少々悪評であつても、ハンパクの余地もあり、又忍ぶことも出來るが、柳人のだらしなさを大映しにされたのではマジメにベンカイも出來ないだろう。從來、長屋の懇親会のような東京あたりの句会のやり方をあらためさせようと骨を折つて見たこともあるが、相当に根强い悪習はそうカンタンに拔ける筈もなく、実は彼等の行動にはサジを投げていたのである。この際モット徹底的にたたいてもらつた方がクスリになるかも知れない。ただし「R・H・ブライス氏に世界的諷刺文学とほめられて柳壇は現実をタナにあげ、鬼の首でもとつたようにいゝ氣になつてアグラをかいているが、その内幕はあきれるばかり古い」と云つているが、これはこれを書いた記者の視野の狹さからで、私たちはブライス氏が世界的だとホメたからと云つて鬼の首をとつたようないゝ氣にはなつていない。むしろブライス氏が、ジャーナリズムに躍らされているものと睨んでいた。それは彼が例句を挙げるのを見ればすぐに判断が出來るからである。外人で川柳が判るのは、パパ、ママのその子の親のアッパッパの作者であるグレン・ショウぐらいなものだ。あとは一知半解の徒と云つても過言ではないだろう。ブライスさんにはもつと勉强して欲しいと思つている。

兎に角「さる京浜川柳会でも焼酎の一斗ガメ以下廿五等の景品を前に雀郎らの大家までが、眼の色を変えんばかりの競吟だつたと云う」と書かれるようではお話にならぬ。「手締り」などをするのは滑稽だ。アレは、カキツあたりの名殘りかも知れない。

この問題に就ては、大いに書きたいが、もうスペースがないから他日に讓ろう。

BKが川柳募集

多年中絶していたBKの川柳募集が、來る四月から華々しく復活することになつた。民間放送がしげきしたのかもしれないと云う人もあるが、何れにしても関西の柳人にとつてはよろこばしいニュースに違いない。

二六年四月――廿七年三月にいたる一年間、BKが毎月川柳を募集、秀句五句、平凡十句に短評を加え放送することになつた。

選評は左記四社の十二氏で担当。〔神戸〕ふあうすと川柳社三條東洋樹氏(四月十四日)房川素生氏(十一月十七日)、〔大阪〕せんば川柳社の堀口塊人氏(五月十二日)、岡橋宣介氏(十月十三日)、番傘川柳社の岸本水府氏(六月十六日)、脇田梅子氏(八月十八日)、近江砂人氏(廿七年一月十二日)、大石文久氏(同三月十五日)、川柳雜誌社の中島生々庵氏(廿六年七月十四日)須崎豆秋氏(九月十五日)、水谷鮎美氏(十二月十五日)、市場沒食子氏(廿七年二月十六日)、募集課題はラジオ告知板の時間に発表するので、柳人各位は留意されたい。

(路郎)

四月号目次

題字……麻生　路郎
表紙……岩田　清

新川柳評釋百句
昭和の作品から(3)…麻生　路郎…(八)
田に底のある話其の他…吉田水車…(一五)
川柳原理(2)…福田山雨楼…(一三)
川柳と漫画に就て語る……諸家…(一〇)
或る日の句会……S・Z…(二二)
小説・**將軍娘**(28)……山路閑古…(一八)
二つの話題……麻生　路郎…(一二)
詠史川柳「**にっぽん**」(7)
戸田　古方…(一九)
不朽洞喫煙室……(二〇)
豆秋・綠之助・鮎美・
瓜平・喜由・貴山

★

不朽洞句帖……麻生　路郎…(九)
近作柳樽……麻生路郎選…(一二)
川柳塔……麻生路郎選…(一四)
同舟近詠……諸　家…(一一)
課題吟「役得」……西尾　栞選…(二二)
「赤字」……土井文蝶選…(二二)
各地柳壇……(二三)
動静……(二八)
不朽洞会から……(二〇)
編輯室にて……路郎生…(二八)

川柳原理 (2)

福田山雨楼

1 川柳の根本精神(承前)

③ おかしみの近代性

柳樽は川柳の古典である。極端に云えば川柳界のバイブルである。その中の言葉はきわめてやさしく、親しく、そしておかしく表現されており、その内容はおかしみが中心となつて川柳の川柳性を生み育て、確立したのである。つまり今日論議せらるる川柳性は柳樽の傳統が生んだのである。これについて說をなすものは、古川柳は江戸人の所産、江戸生活の反映であり、江戸趣味を基調としたもので、最早時代の殼と化し現代人を生かすに足りないと云い、革新川柳の闘將故田中五呂八など、当時の急先鋒となつてこのことを強く叫んだのであつた。しかし彼等の言說は非難するための非難と、柳樽の根本に横たわつているおかしみの詩情を見拔くだけの、明断と理解と尊敬とがなかつた致命的な欠陷を持つもので、当時の封建圧制下にあつて、よくあれだけ自由闊達に心のわだかまりを吐露し、正義觀を强調し、胸中の俗塵を拂つたことは、実に立派な解放的、反撥的、達觀的態度であつて、ここに庶民の不拔な自由思想が開花したと見るべきである。この古川柳のおかしみの詩情を中心とした解放的な諷詠態度は、現代のわれわれの胸にいみじくも通じて絶えざる郷愁を呼び起すのである。即ち川柳は自らの川柳性を新に確立し、更にこれを純化し拡充すべく過去の傳統に対し充分なる理解と尊敬とを拂うことが要請されるのである。

おかしみの詩情はしかし時代と共に変貌し、発達するものであることを見逃してはならない。單純素朴なおかしみは複雜多彩なおかしみに変り、内面的により理性的、批判的深みを加える。また一面には卑屈な功利的な物欲しそうな、歪んだおかしみも目立つて來る。だから川柳は時代の水準に遅れぬよう、時代の卑俗に乘じられぬよう戒心する必要がある。このことは必ずしも高尙上品さをねらうと云うことではなく、川柳人自らが時代から置去られぬよう、その視野を廣め心情を深め文学的センスを磨くことを忘れてはならぬのである。芭蕉は「高く心を悟りて俗に帰す」と說いたが、川柳においても不易流行の原理と共に味わうべきである。

末弘嚴太郎博士はかつて本誌に「暴政は人心を皮肉ならしむる」と題して執筆されたが、おかしみを追求する現代人の心理は飽和狀態すら呈している。試みにラジオの番組を見ても、話の泉、二十の扉、頓智教室、愉快な仲間、上方演藝会、ラジオ寄席、日曜娯樂版等ユーモア、機智、洒落を主とした内容のものが多く、また新聞、雜誌の笑話、漫画、うそくらぶ、ユーモア小說、肉体派小話、ユーモア小說、肉体派等が誌面をにぎわし、演藝映画方面でも喜劇、落語、万才、漫談等が不相変流行を極めている。敗戰の冷嚴な事実を忘れたような熱叫ぶりはチト腑に落ちないものがあるが、これはしかし反動、逃避、虛脫、無氣力、浮薄等から來た世紀末現象ではなく、日本再建を讃える鼻唄的伴奏であると見るのが妥当だと思う。おかしみは先に顕原博士の言葉を引用したように、文化復元の原動力となりその成長を助けるものであるからである。

因にイギリスの社会では「常にユーモアの感覚が尊重され、これを欠ぐ人間が精神的不具者として世に疎んぜられている事実、更に家庭にあつては親は子に、学校にあつては師は弟に、凡そ物心がついてからひとり世に出るまで、人生ただこの一事のみは忘れるなと、日夜頭の ド眞中に叩き込まれるのが、誠実廉恥の精神とそしてこのユーモアを忽せにしない心構えなのである。彼等にとつてその一は人生の米であり、他の一は塩に外ならない。」と池田潔博士(慶大教授)はのべていられる。またアメリカにおける劇映画には喜劇的な作品が圧倒的に多く、ドラマ風な喜劇とどたばた喜劇を合せると全作品の三分の一(一九四八年度)に達すると云うことである。フランスや南欧にも喜劇の歓迎されていることは周知の通りである。

時事川柳は時局に関連して政治的、社会的、思想的、風俗的、道德的におかしみの詩情を捉えるものであるが、一般に秀句の乏しいのは川柳が時局諷詠に適しないからではなく、着想とレトリックの未熟に基因するのである。時事川柳は尙進んで國際的、世界的な廣汎な視野に立つて取材し道破することも考えられるのであるが、しかしこれには川柳の飜訳と云う困難な仕事が伴い、優れた句の海外紹介がなされて始めてその意図が徹底するのである。がこの飜訳問題も從來多くの見解では微妙な言葉の意味、省略法等について外人の理解に訴えるべく至難の業であると云われ、悲觀的な意見が圧倒的であつたが、講和後の國際場裡に参加し文化の交流が盛んになるにつれ、打開の途が開かれるであろう。決して夢ではなく実現の可能性があることゝ思われる。おかしみの理解については「藝術に國境なし」と云われる通り、必ず正しい鑑賞と受容力が海の外から訪れることを信ずるものである。

要するに川柳のおかしみの近代性、世界性、永遠性については、われわれは大きな希望と期待と確信とをもつて推進すべきである。

おかしみの世界が如何に人間本來の感性、知性、理性に直結しているか、そして如何に廣汎であり豊饒であるかを自覺し、更に川柳が常に新しく社会、國家、世界と共にあるもの、同時に永続的な宿命につながるものであることを牢記すべきである。

日本の憲法は詩であると云われるほどに、至高至純の國民的理想を盛つており、このいみじくも高朗清廉なる川柳詩の存在と発展とを見守つてくれていることは、奇しくもまた愉しいことである。

(未完)

川柳塔

大阪市　武部香林

この道で無沙汰を交す初詣

講和問題

社会党晴着を少し裁ちそこね
赤い塵拂うに$の惜しみなく
無分別命に鉋かけてゐた

兵庫縣　戸倉普天

拾歳の子もあり赤いジャケツ着て
洋裁師若くして税の悩み有り

大阪市　浪玲之介

氣の弱りだろうか妻の有難味
此頃の親類借りも貸もなく
駈引の発車の笛に尙慌て

奈良縣　上田翠光

此の辺にある人参の雪を掘り
こんな時に甘へとく氣の妻の風邪

平塚市　木村孤浪

教会の帰りも踏まれ踏み返し
傲慢に三等からは見える也
復讐は唇を嚙む丈けに老ひ
停年に虚勢あつさり扱はれ

横浜市　福田山雨楼

再武装？　わが哲学はぐらつきぬ
死期のびる藥と聞いてにたりとす

悼長岡半太郎博士

学問のいのち最後の一齣にも

國の家あまりに古び涙をのみぬ

父の死

人間の苦悩返したデスマスク
車座になつて田を賣る話冷え

池田市　戸田古方

人力に乘つてもみたくなつた醉い
ちつぽけな貸があるので資本主義
辛抱せいという説教はきゝあいた

東京都　前山北海

二十七の処女あつさり囲われぬ
社会科の宿題母も持て余し

布哇　内藤草一郎

銀行へお勸めとかでさらの札
老いぬればこうなると云ふ母を連れ
何がどう不足で浮氣なさいます
当分は帰つてやらぬと里でじれ
出所して見ればあいつは人のもの
年頃の香り診察手間が取れ

尼崎市　水谷鮎美

しらさぎより

過熱狀態キミとボクとは灰に似し
脱稿へ不貞の妻を許す朝

東京都　宮田不二

來客のこれも間借を請ふひとみ
何一つ買えぬ身デパートへつとめ
一人居に疑音の如く汽車は過ぎ

大阪市　福田妄夢

えんぴつの芯をとがらす娘の眼鏡
夜の女が作りし夜よ

犬牟田市　高田抱逸

醉わされて連帶保証引受ける
御養子の疵はマージャン狂だつた
醉虎傳残し議長は頓死する

時の人選挙準備の墓に來る

布哇　市岡曉舟

好き嫌らい云はさぬ爲の金を貸し
どつちだい酒か女か変な眼で
祭日と云ふに早起きして待つ子

米子市　三鴨美笑

風の子を風呂に入れたで妻ともめ
一刻でも寢てくれたらと氷割る
空想と理想と交叉して寢れず
蒸しタオル女の指が白すぎた

佐賀縣　松野えいを

無表情の只握らせてる冷たい手
梅の枝手に〳〵振つてバスを止め
侮りの足袋の継ぎまで見逃さず
ストリップガールトロールの魚に似て

大阪市　市場汲食子

もう医者も義理で診に來るだけのこと
松の内こゝにも寂しい鯨幕
棟上げて後の工面にまだ走り
春早々醉うた姿を写される
三ケ日勿体のうて店を開け

名古屋市　吉田水車

門松の或はこけて松明ける
左様ならと言う言葉あり淋しかり
衣食足りそろ〳〵神をおもい出し

大阪市　須崎豆秋

ふるさとの炬燵に写眞帳展げ
軍事予算吃らな云へぬ程の額
金儲け兒戯に似てると思へども

大阪市　黑川紫香

駅長も長靴で出る山の駅
なんやかや云ふてゝ子供こさへてる

大阪市　竹内潮花

車窓もう春の色して白帆浮く

トンネルの口で別れて去ぬ恋か　兵庫縣　北川春巣

妻の手のひゝが或る夜の目に痛し
はやるには非ずスクーター医者の趣味
戰爭でおどし轉勤させられる

祝M君結婚

今日からの靴は違つた手で光り　奈良縣　尾崎方正

疲れたる午後はパイプもやに臭さし
大地呼吸すゴム靴に感ずなり
無理すなと言はれた方が生き残り　下関市　櫻川不水

生きづくりの鯉とはむごい肴なり
一人のむさびしさ受話機摑んでた　大阪市　清水白柳子

簿記帳をとぢよと机さゝやいた

史路氏七回忌

極楽の話をするに背をまるめ　鳥取市　中島鉄洲

病床吟

何んにも聞かすまいとする妻を慮ふ
病中に暦日のあり支拂日

小康を得て

励まして呉れる友あり同イ歳
食慾が無いとて皿の絵をかえて　大阪市　水谷竹莊

ほろ酔の扇を持てばシャンとなり
何一つ買へとも言はぬ妻哀れ　下関市　弘津柳慶

浮氣する力もなくて見くびられ
座興にはまづ一番に指名され　下関市　國弘半休門

もう足りたらしゆう貰い乳放なす
森羅万象音まで尖る無一文

八代市　佐野卜占

平和な日祖父短冊へ何か書き
再婚をにぶらせている子の寢顔　兵庫縣　小沢史葉

終電で帰れば少し低氣圧
警察へ來てから家出ワット泣き　兵庫縣　小西無鬼

執拗に妻にお灸を奬められ
だしぬけにダンスコーチをせがむ妻
商才といふが動乱見逃がさず
口実は夜業今夜も飲んでゐた　大阪市　土井文蝶

自殺する人とは知らずガスは出る
求職えお歳がねえと断られ
子は少さしがない職に甘んじる
過去帳に酒一すじに生きた父　布施市　糸本醉月

同情はしても税務署差押へ
初風呂で生ける感謝の目を閉じる
窓越しに隣りの子沢山寒う見る　岡山縣　山分淑郎

男もう默つて勝つている姿
歳月が大きな距離にしてしまひ
三十の独身寒い二階借
女なり女なりけり雨の夜　大阪市　大西野介

氣違ひにだけわかる詩よ辞世の詩
らつきようの芯にはなにも無かりけり
なんの情痴ぞ蟹の爪挽ぐ
紙を裂く子の情熱のひたむきな
旧友へさげすんで出す五百円
働く男その筋肉のリズミカル　高岡市　山根白星

永久に平行線と逃げられる

愛人の口のキャラメルまだとけず
女三人ミス・ニッポンをけなすこと
遺言はみだりに判を押すでない
胃けいれんとかでマダムのけふ見えず

東北の貧村に逗留

凶作に娘を賣りに出したとこ　大阪府　種瓜平

半死半生雪チラチラの夢みてる
モンペイの絣へ散つた梅の花
タイピストに借りたマッチはおしるこ屋
酒臭い息で机の塵を吹き
頽のせて枕に訴う夜もあり
一條の煙と果てんか青い空　大阪市　渡辺孫拙

枕燈夜警の声でふつとけし
晴着きて入水の娘あわれなり
吉兆の内職それに貧乏し　大阪市　冨岡淡舟

春を待つ草の強さを見習はん
逆はず待とう時勢は流るゝよ　奈良縣　飯降白香

卒業する生徒へ

サイン・ブック夢を求めて生徒は樂し
ものなべて美しくする送別なり
沈丁花握手の手へも匂ふなり　山口縣　長野井蛙

泣き寢入りまだ〳〵ボスの顔が利き
ボリまでがボスの味方と知るお茶屋
双眼鏡の中とも知らぬふざけよう　呉市　林野甦光

アリランの唄が矢庭に鼻え來る
本ばかり読んで女の一人旅
車窓からよう喰いそうな海の色

大阪市　竹田芦穂

人が良いと親分に叱られる
蓮台の旅を広重羨やませ
定紋へ時々腹の立つ斜陽
もう一本立春大吉酌けさせる
水盤へ埃を浮べ小正月

京都府　間島青丹子

月青く研ぎ澄まされた冬景色
会議室一人抜け出し温泉にいたり
改札を出ても女の無駄話

大阪市　上田春柳

艾の火点いたまんまでおいでやす

白井松竹会長の葬式

建観すればお葬式の派手な顔

大阪府　友淵貴山

還る氣がしますと写眞拜まない
髪結ふて全快祝ひ買いに行き

布施市　森下愛論

水入らず郊外電車軽く搖れ

大阪市　太田良子

派手にすればするで職業怪しまれ
家中が醉うて仕舞ふたお元日
さゝやかな生玩具だけ目立ち

尼崎市　靜岡忠八

給料はあがらず米價又あがり
絵に描いた餅憲法も役立たず

廣島縣　松井可笑

叱られた孫をあやして叱られる

大阪市　松江梅里

天ぷらの匂ひへ腰を据える氣か
衣食足りそろ〳〵旦那と手をきろう
いざこざがあつて散歩に出たまんま

岡山縣　直原七面山

未亡人判然り好きと云ふてのけ
逢曳も度重なつて夫婦めき
膝を貸す女心の母性めき
寸秒を惜しむ別れの手を握り
旅に來て雨は淋しいものと知り
腹ばへば猫は背中へ位置を変へ
薄情に似て靜なる父の愛

宇部市　上林粗影

曲りなりにも子の説に傾いて寢た
祖父は痔藥祖母は眼藥置炬燵
因業な家主の葬式に珠数を忘れた
犬の名付けに家内中頭をしぼり

鳥取市　河村日満子

自腹切るまでのプランにあらざりき
お互ひに助け合はうと醉つている
申訳ほどの酒ありお元日
底拔けの騒ぎ費用は会社持
まつさらの疊わが家の違ひやう

兵庫縣　家沢薺花

失業の部屋にでつかいカレンダー
歳の市妻に買物持たされる
珍客にされて土産がはづかしく
待たされて透いた電車もやり過し
やけ酒を雪見酒かと羨やまれ

滋賀縣　黄瀬美秋

療養のかたわら着々すゝむ恋
看護婦へいたづら出來るほど癒り
税務署へ誰憚らぬ嘘をつき

岡山縣　藤本満年

いたずらな風泥棒の音もたて
貸ボートしよんぼり岸で春を待ち

熊本縣　西口如川

絵の様に蛇の目が並ぶ渡し舟
書生部屋十年先の俺を見よ
大吉と出て神様を又拜み

岡山縣　福島鉄兒

又買うておかねば損な氣がし出し
殺す氣を思い直して又口説き
火葬場に煙が上る松の内
貧乏になれて春へは振り向かず
サービスと云う心よいつめりやう
サービスもこれが限界点と云う

岡山縣　直原湖月

虚栄だけは満して呉れる人に嫁し
慾が無い様に見えてる意氣地なし
役得へ希望の品の名を並べ
諦めが身につき嫁は褒められる

岡山市　藤本茶々

後悔はしないと言つた意地があり
眞夜中の街角フツツと出て來そう

兵庫縣　榎南夏六

熱あげてゐるのに女余裕ある笑ひ
内緒です今年の暮に貰ひます
いやしいさかいと腹痛を叱られる

大阪市　伊藤迷宮

トラックにふら〳〵とする家に住み
愛のない結婚でした審判所
羽子板に娘らしさを取り戻し
信用がどうのこうのと露天商
投寶りもたゞ呆然の人通り

兵庫縣　小畠無聖

靴磨自分の事は忘れたり
張り切つた女の声の薄情さ

姦落も過ぎればちよいと悔られ
失業が野球のファンにしてくれた
大阪市　西　いわを

氣がついてみれば目高が死んでゐた
前職が物言つてゐる露路の奥
魂の去らないものを持ち続け
岡山縣　高山朗笑

好きですと夢ではすらり云えるなり
言訳の心がにくい待呆け
北京への初旅
一跨ぎ地図ではこうも近く見え
岡山縣　杉山一貫

出稼ぎの覚えて來たは酒の味
党派とは別に縁談持込まれ
寢正月牛もその氣で寢て居ます
食ふ丈は残して呉れて父は逝き
岡山縣　服部十九平

私等と複数で言ふ新世帶
舌を出す辯が花嫁まだ止まず
小さな幸じつと大事に抱きしめる
駅前の引揚感謝のペンキ剝げ
岡山縣　大森娯句樂

火の子散る中勇敢さ照し出し
折詰のパセリに坊や欺されず
呑むだけに傑作もやり味噌もつけ
馬鹿にした挨拶今日も呑んでるの
西宮市　田辺由布

何処でどう儲けているか家も建て
存在を見なおされてる九十の死
こゝえ來りや女は強いホテルの灯
痴話喧嘩女ます〳〵うつくしい
泣く手など古いワ妾默否權
大分縣　桑原表情

税金をまけて貰つた夢だつた
公金を費つたらしい隠し藝
三人の候補に色よい返事をし
熊本縣　成瀬月仙

女学生乳房抑へて辞典操る
滞納も忘れ仔猫と日向ぼこ
芦屋市　若林草右

往診をしたらお経に鉦の音
車中談もうそう〳〵は欺されず
二十万円へそくつた記事女房讀み
大阪市　足立春雄

シグナルとレールに春の雨が降る
大牟田市　中村五醉

ご近所に憎まれて搗く旧の餅
指物屋の腕を子供等來て眺め
日曜の課長屋根から返事する
あきらめてほしいともろたペンで書き
熊本縣　有働芳仙

堕胎する前に札束数へられ
臆病な男へ金のある強み
足音がとても嬉しい新世帶
岡山市　延永忠美

御帰館へ関所が一つ開店し
税務署の級友一人が攻められる
信心もつき合だつたかもう來ない
父さんへ内緒と兒等も心得る
倦怠期ズボンはしわのまゝであり
大阪市　米田孤舟

鉄骨が空に画いた美の構図
大阪市　浜畑胡蝶

よう食べりや食べたで母は氣を遣い
共稼ぎしてゐる妻のダンス熱
下関市　石川侃流

急流をさへぎる岩のたのもしく
妻が病み今日も泥靴はいて出勤る
大阪府　阿形一杉

諾と言えばもう逆立もし兼ねない
海越えて戻つた日記本となり
亡妻の子が鏡台を取りに來る
相客と置床もない部屋に寢る
古本屋のとなり鰻の頭賣る
大阪市　麻生葭乃

インキの赤さボートワインに見えて來る寒さ
箸うごく通りに猫の首動き
返信でくだ巻きかへす飲仲間

新柳川評釋百句

（Ⅲ）

昭和の作品から

麻生路郎

敗戰直後から數年間は闇行爲が物凄いほどはばをきかすし、暴力が巷に横行するし、物價はグン〳〵暴騰してインフレ狀態を呈するし、所謂てんやわんやの時代である。こゝに拾いあげた句はそうした時代の雰囲氣に浸つてはじめて句意が正解し得られる訳で、そうした時代の裏づけがないと、ワサビの利かぬ刺身や、氣の抜けたビールと何等変りのない句としてかえりみられないかも知れない。

米を磨ぐ音絶ゆるなど思はざる

（鉄洲）

主食の配給制度こそうまれたが、欠配に次ぐ欠配で、一日として易い心はなかつた。日本は昔から瑞穗の國と称していた。おてんと様と米の飯は何処へ行つてもついて廻ると誇らしげに云つていたものである。それが一朝にして米の姿を見失い、今日も代用食、明日も代用食の世となつていたが、米を磨ぐ音が絶えるなんて思つても見なかつただけに、フトそのことに氣づいたのである。作者ならずとも感傷的にならざるを得ないではないか。

古くとも僕には仁義禮智信

（路郎）

共産党が「アカハタ」と云う新聞で、天皇と皇后のことをヒロヒト及びその妻と書いていたころに詠んだ句だと覚えている。事実はヒロヒト及び其の妻であり、それが新らしい行き方なのかも知れないが、國民感情はそう簡單に動くものではない。それと同じように、所謂戰後派の思想には私たちと相容れぬものの多くが含まれていた。私たちはあたまから新らしい思想を拒避するものではないが、あまりにも無軌道ぶりなモラルに対しては首肯し得なかつたのである。

そこでこんな句が生れたのである。

急停車自分もころび芋ころび

（錦風）

あのころの郊外電車は米や麦や芋の買出しで雒詰滿員だつた。車窓のガラスは殆んど破壞され、窓から出入りする混乱ぶりだつた。電車は事故の続出で急停車ぐらいは物の数でなかつた。ドカンと急停車をすると、乘客は將棋倒しの憂目を見るのである。後生大事に抱えていた風呂敷包がフロアに投げ出されると、芋がコロコロところび出る。それを追いかけて拾いあげる姿は滑稽そのものであつたが、しかし笑うものは一人もいなかつた。笑つている余裕なんかなかつたのである。それほど眞劍だつたところを詠んだのがこの句であるが、句の表面にはユーモア味が溢れていて面白い。

今日休みかとサボツたを子に訊かれ

（春巢）

明日の食糧がない。イヤ明日の食糧どころか今日喰べるものがないので思いなやんだのが実狀である。仕事を休んで、買出しに行くと云う切実な問題が、世帶主の大きな責任であつた。しかし子どもたちの多くは其処までは知らない。出勤をしない父を見れば休日としか考えなかつたのである。この句のかげにひそむ親心を汲みとることが出來なければ、この句の價値は半減するであろう。そこに社会相の裏づけが必要なことは云うまでもなかろう。

經歷が良すぎ掃除夫にもなれず

（雅美）

徵用から戻つたが、昔の仕事は手をうけて待つていてはくれなかつた。待つているのは失業だつた。僅かな手当はまたたく間に使い果した。物價はドン〳〵あがる。妻子からは苦情が出る。面子なんか云つていられない。どんな仕事でもよいと云つたところで、前歷が良すぎて掃除夫にも使つてくれない。使つてくれるとしてもなりたくもなかつた。斯うしたなやみを詠んだのが此の句である。

受取りに來ぬか石屋に大佐の碑

（文庫）

曾ては武勳嚇々たりし陸軍大佐何の某の碑が石屋の隅つこにころがされたまゝであるのも敗戰國の非哀であつた。生きてれば追放は必定の身分であるが、墓石となつても、もう受取りにも來てく

れぬのであろう。人情の薄い人の世の淋びしさをしみ〳〵と感じたのであろう。なんでもないように詠まれてあるが、深酷な句である。

負けたのも知らないヒマの二三本

（豆　秋）

敗戰後、そこらに、ヒマの二、三本が残つているのを見て、そぞろに戰爭当時を偲び、こんな句を詠んだのであろう。一時はヒマを植えろヒマを植えろと、ヒマの種の配給までして來たものである。鉄道の沿線までも隈なく植えたのがヒマだつたことを思うと、飛行機のない今日この頃では、ヒマのことなどはケロリと忘れている。おゝヒマよ、笑え〳〵、敗戰日本の現狀を、と云いたくなる。

道普請やおへん大根まくところ

（玲之介）

一坪農園と云う言葉が生れたほど、空地と云う空地を利用して、野菜作りをやつた。おしまいには屋上にまで土を運んで野菜をつくつた。それをしなければ、堤に雜草を求めるより外に手がなかつたのである。野菜に対する都会人のなやみは大きかつた。どう〳〵路上に茄子や大根や胡瓜や南瓜まで種をまくようになつた。泥坊を捕えてから繩をなう有様を、いたるところに見せつけられたものである。それを詠んだのがこの句である。「おへん」は京都の方言で、ないと云う意。

お茶菓子へうつかり値ぶみしてしまひ

（緣之助）

イヤ、全く、この句の通りであつた。砂糖が統制品なので、いもで味つけしたような菓子すら、なか〳〵容易に手に入らなかつた。少しく菓子らしい菓子になると、すこぶる高價な代償を拂はなければならなかつた。すこしましなお菓子を出されると、すぐに値ぶみしたものである。なさけないと云えばなさけない世の中になつていた。当時穿ちの句として、コレぐらいピンと來た句はなかつた。

燃料飢饉

創意から大牟田川の泥が燃え

（抱　逸）

思い出してもゾッとするのは燃料飢饉のころである。いろ〳〵の燃料が案出されたことは云うまでもなかつた。石ころのようなものを、七輪の中へ放りこんでその上で木片や、殆んど九分までが泥のやうな炭團で熱量の増加を計つたことさえあつた。この句はそうした燃料難時代に大牟田川の泥を燃料とした經驗を詠んだのであろう。関西でも琵琶湖畔の泥を燃料としたものである。それ等の泥は、水際の枯草が腐敗して泥の中にまじつているので、そのドロを干して燃料にするとよく燃えるのである。窮すれば通じるとは云いながら、実になさけない世の中ではあつた。この句など一つの記錄的な川柳だと云えよう。

不朽洞句帖

麻生路郎

五十円以上お買上げの方の一人にされる
大佛つあんえはとう〳〵寄らなかつたふたり
浅春の奈良で見かける老夫婦

鏡輪（二句）

酎を飲むだけを本命稼がせる
まだ未練あつて予想屋するつもり

ちち、ははにめぐりあひたや靴みがく

（豆　秋）

敗戰後、街から街え、戰災孤兒があふれた。その多くは生きて行くための靴みがきを業とした。靴をみがきながらも、忘れることの出來ないのは父のことであり、母のことであつた。作者はそうした哀れな孤兒え同情の眼をそそいだのである。あのころの靴みがきを髣髴とさせる句である。

風呂敷に包むと米の哀れなり

（普　天）

米の一升買い、二升買いと云うことは昔は余程の貧乏人でなければしないことであつた。何処の家庭でも米櫃と云うものがあり、米は米屋の手で運ばれ、米櫃におさめられたものである。ところが、主食の統制から、配給制度が生まれたのはいゝが、遅配欠配でなくても、米不足で眼の色を変えた人たち、殊に都会人は仕事を休んで闇買いに狂奔した。統制による警戒網をくゞつての闇買いに大量の米が運べそうな筈もなかつた。風呂敷包みにした僅な米を宝物のように抱え込み、農家をあとに逃げるように戻つて來る姿も哀れであつたが、作者は、それには触れてはいないで、尊い米を風呂敷に包むと、なんとなく主食の王としての米が光りを失つたことを斯くは詠んだのである。

復員の順に近所に子が生れ

（美　江）

次ぎ〳〵に復員をして來て、なつかしい祖國の山河に接したことは、本人はもとより周囲の感激のいかに大きかつたかは想像に難くない。赤の敎育をうけて復員させられた人たちの間には、多少のイザコザもあつたが、いつのほどにか、愛のきずなによる幸福な生活え引きもどされ、復員の順に、近所に子が生れたこともうれしいうつり変りであつた。そこをとらえたのが此の句で一読ほゝえましくなる。

川柳と漫画に就て語る

麻生　路郎氏

水谷　鮎美氏

浪　玲之介氏

種　瓜平氏

猪飼　淑藏氏

須崎　豆秋氏

亀山　晴峯氏

麻生　梨里氏

近頃はどの新聞でも連載漫画をのせていない新聞はないと同時に、漫画と一脈通じるところのある川柳と漫画と云うことがよく話題にのぼるので、大阪日日新聞社の猪飼文化課長をゲストとして一夕座談会を試みた。出席者の似顔上から１２３と　左の２３４は瓜平氏画　右の４左の１は晴峯氏画

豆秋＝それでは皆さんお集りになつた様ですから、ぼつ〳〵始めましょうか。今夕は漫画家であり川柳家である瓜平さんの外にゲストとして大阪日日新聞社の文化課長さんをお迎えして川柳と漫画に就いてお話願うことになりました。元々川柳と漫画とわ、一脈通じるものがあり、共に社会人事を対照とした人世批評の藝術でありますから、お互いに結び合い高度の信念を持つて、大衆の先達とならなければならぬと思いますので、色々と御意見を交えて検討して頂きたいと存じます。先づ川柳と漫画の類似点に就いて瓜平さんからどうぞ……

瓜平＝私の川柳を作る氣持は丁度タンクの中の水を浚えるやうな氣持……漫画わ大きい杓で浚える。大きい杓でとゞかないときは小さい杓で―この小さい杓が川柳と言う氣持を持つている。つまり藝術としての方向は川柳も漫画も一緒なんですがね。対社会的には川柳と漫画とは相当開きが出て來る訳です。それは先程、豆秋さんも言はれたやうに、同じ処を突いていながら、今までの川柳が決して漫画にならない。又漫画が即川柳になると言うことは殆どないわけでしてネ。それは川柳自体が非常にデリケートな処を狙つている。デリケートな処は一般大衆に見せる漫画にならない場合が多い。それから川柳の非常に氣眞面目に諷刺したり、まともに人世と取組んだ場面は所謂俗に言う漫画としての商品價値が伴なわない。例えば先生の「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」なんかわ漫画としてはねえ。ですから私達が漫画家としての漫画を作製している上に当つて漫画にならないもので色々とアイデイアが浮んで來る。こう言うものは先程申しました大きい杓では浚えられない。その鬱憤を川柳に求めるわけです。それは非常に尊いものである。俗な一般的な漫画にならなくても尊いものこれが自分の作句態度ですね。

路郎＝商品價値がなくても、小さい杓ですくう漫画を書く氣持にはならないものかね。そうすると漫画と言うものは商品價値を外にしては画く氣持がないと言つてわ語弊があるが、画かないやうに受け取れるが、僕はそうした小さな杓ですくうやうな漫画を画いたらいゝと思う。

瓜平＝無論、川柳ですと、此処に茶碗が一つあるとしますネ、半分飲みさしたとか、茶柱が立つているとか、これは川柳になります。然し漫画にならないかと言うと漫画にもなる。その茶碗自体はネ。然し商品價値と言うと俗つぽく聞こえますが、所謂漫画として大衆に喜んで頂くものには弱いんですね。小さい杓と言うたのは語弊があるが、漫画にも烈しく人世にぶつかつて行くものはあるんですが、漫画と言うものは絵画の力を半分借りているものだから、川柳以上に生であつて、絵画的な要件が必要になつて來るわけですから、その製作心理は全く同一なものでありながら、そう言う表現形式の相違によつて、ウンと開きが出て來るのぢやないかと思うんです。

鮎美＝先程から皆さんと同じやうに私も膝を崩して心の坐禪を組んで拝聽致して居ります。漫画家の瓜平さんの仰言ることにも頷けますが、然し一寸申上げたいのは、今此処でも夕刊山陽新聞を見せて頂いておりますと漫画が出ております。この頃の新聞には必ず漫画が夕刊新聞に掲載されていることです。それは大いに漫画時代とも言うべきでしょうが、只今の山陽新聞の漫画が「アラ・マー子さん」それから産経の「ポタちやんモチちやん」同じく産経の「グーさんパーさん」大阪新聞の「おてんきテレちやん」新大阪の「ゼロさん」夕刊毎日の「デンスケ」等々こゝら相当な新聞紙上の漫画の題名そのものが漫画になつている。それはあまりにも上滑りがしていて、連載漫画を見なくても一見は百聞に爲かずと言う結末になるのでありませんか、これは或は時代の要求かも知れませんが、あまりにも軽卒です。先程言はれました瓜平さんの言葉を借りるならば、今少し世の中の尖端を行くべきが漫画家そのものゝ使命ではないでせうか。世の中に並行しているのは遅れたる漫画界とも言うべきです。昨日の新聞記事が今朝漫画になつている。朝刊の記事が夕刊の漫画になつてゐる。厳しい世の中です。今少し掘り下げて頂きたい。川柳も色々観方があつて、漫画即川柳では我々の生命はないのであります。漫画家も心行して頂き、柳人も今少し掘り下げて路郎師の言はれる「命ある句を創れ」に順應されて益々精進したく思われてなりません。

猪飼＝漫画を新聞に連載する以上は先づ第一に時局性が欲しいので

す。そして笑い、軽み、同時に鋭い諷刺があつて欲しいと私は常々考へていますので、漫画家の方に対しても相当その線に添つた無理な注文を実際にしています。そうなると、これは川柳と非常に通ずる点があると思うのですが、麻生先生如何ですか。

路郎＝さうですな多分に通ずる点はありますが、漫画と言うものが商品價値を第一義的に考へてゐるのと、我々の川柳は商品價値などは殆ど埒外に於て作句している点では共通点がない様に思います。川柳でも商品價値と言うことを問題にして作句する時代が來るかもわかりませんが、一般的に言へば甚だ遠い問題でせう。では全々商品價値を無視しているかと言えばそうでもありません。例えば「温泉」と言う雑誌から句を寄稿してくれと言われゝば、温泉を無視した様な作句を除外して送るだけの心掛は多少意識的に働いて、寄稿していることは言うまでもありませんが、そうした寄稿はオール川柳人に寄稿を依頼される訳ではないので、一般の川柳人から言えばそう言つた問題を無視して人世観、社会観を鋭く表現している訳です。

猪飼＝今商品としてのお話が出ましたが、新聞の場合、先づ良心的な漫画を第一目的としたいんです。良いものであれば商品價値は自づから出て來ると思います。

路郎＝良いものであれば商品價値があると言うことは必ずしも言えないと思います。例えばストリップショウは商品價値わあるが良いものだとは言えないし、非常に優れた出版物が案外発行部数が少いと言う事実もあります。その点良いとか悪いとか言うことの基本を何処に置くかと言うことが問題です。新聞では社会道徳上良いものであるよりも賣れると言うことが良いものであるやうな感じが、現在の新聞政策上行はれているやうに思います。賣れなくても困る此の「ブロンデイ」だけは愛読させております。もう少し漫画と川柳は、マッチして向上して行きたいものです。

瓜平＝今鮎美さんが言はれました連載漫画と言うものは漫画と言えば連載漫画として一番親しまれますが、漫画の領域から見ると最も通俗的な一部に過ぎないのです。先程猪飼さんの言はれた事は新聞と言うものは大衆のものであると、從つてよく賣れてよく大衆に

同舟近詠

松山市　前田伍健

女子議員慢性ヒスと誤まられ
小唄誰？、あれ？、かずらであつたのか
四十八手総理は鼻であいしらい
武装とも非武装だとも牛の角
蜷に似たくらしそれでも活きて居る
街録のウルサシと見て有難う
老妻は達者厨の午前五時

金沢市　安川久留美

寢疲れという贅沢な部屋にゐる
半分に割り菓子の値が見つもられ
パッと名の出たは昔で佗住居

大阪市　橋本綠雨

叱ること多いお膳が続く也
人はみな幸福なやうに言つてくる
花生けの花はしほれるだけのこと
やせこけてガム嚙んでる氣の毒さ

が、今少しお互ひの生活が向上するやうな方針で臨んで欲しいと思います。

鮎美＝先程の諸新聞の漫画のことを言いましたが、朝日新聞のチャックヤングの「ブロンデイ」あれは良いと思います。非常にエチケットを何れの場面に於ても心得ております。子沢山な私は子供達に親しまれなくてはならない。從つて漫画家もその線に添うた漫画を要求される。そう言う意味に於て良いものと言つてもですネ。大衆的と言う上に立つて良いものでなければならない。其処に現代漫画家の悩みがある。然し大衆性のないものは絶対漫画でないかと言えば非常に優れたものであつても大衆に受けないものがある。殆ど純粋美術に近いもの、或は文学的に高尚な漫画が多々あると言うことを美術家である亀山さんに共明してもらいたい。

猪飼＝私の良いものと言うのは時代の要求する品位のあると言うものです。

晴雀＝川柳人として出席さして頂いた僕が画を二十年嬲り、エンヂニアとして機械で二十年飯を喰つている立場に於て少なくとも現在の漫画家に対して相当手痛く小言が言いたいと思います。嘗て僕の東京時代に神田の磯部甲陽堂が漫画専門の本を沢山出版して、そこに立籠つた岡本一平、近藤浩一路池部鈞、前川千帆、服部亮英、山田みのる、小川治平、細木原青起等こう言つた当時の漫画グループと言うものは、第一時大戦当時のカイゼルを何より震い上らせた西欧の漫画家にも西敵する、時代の宰相をも嫌がらせた鋭い批判的な漫画を、しかも現在の四枚一組の話の落しの如き漫画でなく、一枚漫画でもつてズバリとやつつけた当時の氣慨を懐しむものであります。けれども思うに漫画と川柳の共通点は先程皆さんから意見が出ましたが、結局自由な眞実探求の精神であり、少なくとも人の氣付かぬ眞実を一皮剝いで、川柳わ十七音字を原則とした短詩型として現れ、漫画わ絵筆を持つて画面に表現さすものであり、それは一面野党的面魂でもあり、然もそれで止まらず、何物にも囚はれることなき自由批判の精神であり、その対照は人世の眞実性の探求であると言う点に、僕としては結論を持つて行きたいと思います。

現代の作家で東京の横山隆一氏の仕事の量、小野佐世男氏の家庭漫画、南部正太郎氏の軽いギヤグ瓜平さんのイット等は非常に好意を持つて見ております。結局川柳と漫画と言うものは、色々と相違点はありましょうが、表現形態が違うのみでセンスに於ては共通に流れるものがあると信じます。

豆秋＝それでは色々問題になり勝ちな川柳漫画に就いて玲之介さん、何か……

玲之介＝何か喋らして貰わなければ家に帰つて浮氣をしていたのでないと言う証明が出來ません。

路郎＝アリバイか（笑声）

玲之介＝漫画とは世界の言葉だと

近作柳樽

路郎選

親切な車掌に叱り飛ばされる　鳥取市　森本法泉子
アベックにすまないとこに席をとり　同
これはまた百円札を栞にし　同
集金は元將校と知れる服　同
散藥をのむ器用さも一人子の　同
銀行を眺めて通る十二月　同
赤ちやんの機嫌鋏を持つてゐた　大阪市　木村　草々
継母の若さを憎む淋しい娘　同
新聞の不幸な記事に子も坐り　同
パチンコえパチパチやけの捨てどころ　同
生活苦エノケン一座知らぬやう　同
目次みて絵をみて定價みてやめる　愛媛縣　渡辺　曉童
既にしてみかんの味も二月なり　同
投げ飛ばされた人形に似てるのが僕　同
夫婦相和し老眼鏡を間に合わせ　同
ひつそりとして拾円のしわをのし　同
有卦に入る人へ赤字を話し過ぎ　倉敷市　木村千代男
絵付した人に会ふよな絵の茶碗　同
歌合せ男いきりが身にせまる　同
春風はわが自主権を吹き戻し　同
色彩の飛躍を古老うけ容れず　同
戰時中君は手鼻をかんでいた　徳島縣　廣瀬志津雄
割勘のときに財布は持つていず　同
公園の猿の嫉妬のような妻　同
月が出た月も出たけどしも出た　同
妻の恋時が解決するだろう　同

おゝ君も日曜文士開業か　廣島縣　黒本　芳泉
貰う筈だつた息子が儲けだし　同
氣まぐれを土曜夫人と結ぶ夢　同
淨財があんな奴等の酒になり　同
邪教今衆愚を說いた大普請　同
寒がりや寒暖計を買うて來る　布　哇　滝　純香
自働車を買うから金を貸して呉れ　同
若い娘の方へ人ごみ押して行く　同
階級が違ひ年始にも行かず　同
大晦日子供は叱られ通しなり　同
ウインクも春めいて來る妓の若さ　石川縣　山田　陽々

山中温泉雜觀

コケシ買ふ人もコケシの様な顔　同
空世辞につられ土産を買つている　同
ドカドカと温泉に來て炭坑節　同
立ち小便山水の美に相対す　同
百姓の目先の利かぬのが儲け　高知縣　山本十四郎
美容史のなかに丸髷みつけたり　同
立志傳僕ほど苦労して居らず　同
都では二号村では成巧者　同
葬式をたのむ保険へあと三月　同
冷戰のまゝに続いてゐる夫婦　芦屋市　後藤　志津
インク壺恋の美文を生まんとす　同
道ふんで來いと明治の生れなり　同
モタ〳〵と理性の恋のはかどらず　同
早春の陽ざしへ生きたいなと思い　同

病床吟

肺ですと云へば税吏も逃げて行き　東京都　松井　蛙声
明日手術吾が半生の手記残し　同

ダレス氏

國民の希望鞄にふくらまし　同

一家九人心中

か言う一面の定義を記憶しておりますが、大衆でなしに総ての人間に漫画程喜ばれるものは少ないかと思います。私の家では漫画を読む順番で夫婦喧嘩をしたり、子供を泣かしたりすることが度々です。勝敗は漫画の多い雜誌だけにしています。本質に漫画と川柳は共通なものを持っていると思いますが表現の形式と限界に於て各々が足らざるものを感じられます。それに漫画と川柳の接近と言いますか必要ではないでしょうか。川柳漫画によつて、川柳が堕落したとも言へるし、又大衆化したとも言えると思う。最も良き川柳と最も良き川柳漫画は形影相添うが如く私は待ち焦れています。或る雜誌に「鐘三ツ鳴らして村に落ち着かず」と言う川柳に対して、百性が災天の上で田の草を取っており、村の娘がトランク一つ、下げて誇らし氣に、村に決別する絵を見まして、はじめて川柳も生き、川柳漫画もよいものと頷きました。然し多くの新聞雜誌に掲載されている川柳漫画は、川柳を毒し、逆にまた川柳が漫画を汚しているように思います。

瓜平＝私が兼々考へていることですが、所謂漫画も生き、川柳も生きてる場合わ非常に数が限定される。それは漫画になり易い川柳にのみ止まつて、非常に個性の强い主観的な川柳は漫画にならない。非常に優秀な川柳は漫画にならないものが多いです。だからそれはそれとして川柳漫画とは別に柳画と言う風なものを開拓してみたらどうかと思うのです。それは丁度俳画のやうなもので川柳自体のはっきりした說明でなくて、川柳と着かず

病より世間の無知が死に誘ひ　同
当然の如く婆さん腰を掛け　同
栄轉も左遷も細引綱が知り　愛媛縣　米沢　曉明
淋しさは"LIFE"の写眞はかり見て　同
トリックを写すカメラの淋しい日　同
子のための無理は覺悟の母であり　同
言訳もすら〳〵宿の女なり　同
軈て來る話へ二号蓄めて居り　貝塚市　芝　無骨
共産党と正午まで議論して仕舞い　同
塵箱へ昨夜が匂ふ法善寺　同
賣れ〳〵と古道具屋に見くびられ　同
お預りして置きますと袖の下　同
しつこくも見合をすゝめ坊主去に　大阪府　上島きはち
五十円の月給の頃なつかしみ　同
同権でこの頃亭主多忙なり　同
デパートの屋上にゐる金なき日　同
行末はみる約束で嫁に行き　岡山縣　大森　苑女
長男の夢は花ぞの桃ばたけ　同
入院へ姫鏡台を持つて行き　同
着物一枚買うても田舍うるさくて　同
左遷から左遷停年迫つて來　長野縣　高峰　柳兒
娘に勝手まかせた母の誕生日　同
念を押す女マスクをまた外し　同
月曜日見合の髪を囲まれる　同
寒中見舞又も先手を打たれたり　廣島縣　杉原　愛鳩
長男の寢顔に我もかくありし　同
引越の様に税吏が積んで去に　同
写されてゐるとは知らぬミス職場　同
一軒の家が欲しさの共稼ぎ　東京都　石居　高志
足あとが又すぐ消えた大吹雪　同
停年の眼に子供等が猶ほ小さく　同
浮氣する氣ではなかつた電車事故　同

始発バス氣の毒そうに一人乘り　荒尾市　蒲原　元祿
沓下を脱ぎ〳〵見合写眞みる　同
汽車の窓なるほど瑞穗の國ならん　同

炭労スト

貧にして暇ありストの日が続き　同
親と子の將棋へお茶を入れる母　京都市　若狭　狂風
どん底もどうやら済んだ預金帖　同
消火器の埃へ無事の日が続き　同
間借して肩身が狭い足袋をはく　同
盛り場に育つて子供こましやくれ　貝塚市　津田　千舟
断りの手紙綴縁には触れず　同
エングーヂリングも拔けるほどに痩せ　同
役得の花見が出來る櫻咲き　同
醉えばもうそこらに冬は見当らず　愛媛縣　村上　鍛明
牛の如手錠の男歩くなり　同
やけといふ武器もつていて恐がられ　同
恐しさ十人といふ子のね息　大阪府　北山十字路
宿替の荷シドロモドロにたゞり着き　同
印台の指環吊皮グット持ち　同
乱歩ですか見舞の医者も好きと云ふ　同
口開けて待つのへ歯医者ひまが要り　同
ほたる火の火鉢へ無心未だ座り　今治市　富田　醉歩
せめてもの慰め出納課に座り　同
未だ生活樂にならざり心中記事　同
こうしては居れぬ暮しへ又孕み　同
お姑の愚痴たすさえて見舞に來　貝塚市　宮本　甲馬
さしさわりないように手記まとめ上げ　同
どれ俺が俺がとバリカン組立たず　同
古釘をたゝきのばして轉室し　同
客観的立場とやらで諌められ　貝塚市　上阪　朱人
灯が消えて女女として匂ひ　同
針箱も持つてさびしい男なり　同

離れずの関係にある酒洛た戯画を添えることによつて川柳と漫画を両方共ピッタリとした行き方が出來ると思う。これは川柳雜誌社あたりが先鞭をつけられたらどうでしよう。

路郎＝大正の初めだつたと思うが西沢笛畝と言う画家が川柳画と言うのを俳画に対して画かれてゐたが、何時の間にか消えてなくなつた。小川芋銭あたりの飄々たる画は柳画と言えると思う。漱石に川柳を作らしたら面白いと思うが作らなかつた。漱石の俳句の中には川柳の味を持つたものが相当にあつた。漱石の小説を昔私達は高座落語だと言つていたが、そう言つたレベルで川柳を作るのも面白いと思う。今提案された川柳画に就いてわ一考してみたいが、良い画家が居なくては問題にならない。

瓜平＝「俺に似よ」の句でも普通の漫画家に描かせたら、とんでもないものが出來るかも知れない。親爺の顔と子供の顔と並べて描いたり……

路郎＝昔大丸で子供に関する展覽会があつた。その時に大きな行燈に田村孝之介が僕の「俺に似よ」の句を漫画化した。僕の姿を描きその前に銚子と書物を積み上げた絵を描き、それに僕が句を揮毫さゝれた事があるが、この程度のものには好感が持てる。

瓜平＝私の言つてゐる狙いはそれです。どうですか、皆さん。

露地抜けて來たハイヒールとも見えず　同
肺外科手術
手術明日剃毛の跡なでてみる　貝塚市　武安　嘉彦
療養一途利己主義と云はれても　同　村上　旭童
くす玉も吊してあつて女子病舍　同　小林　鳴子
病歴はカルテの厚さが語つてゐ　同　松永四季無
四人目はむづかりもせず指を吸ひ　貝塚市　中尾　彬光
眼の色でもう逃げてゐる猫の感　同　同　松永四季無
四段抜きそれでも言ひ分だけは載せ　同　同　同
色よりも慾にかたむく更年期　愛媛縣　村上　旭童
金になる疲れだ不服だすまいぞ　同　同　同
素人の証拠又々怪我をして　同　同　同
予感通りの事故えだあれも皆無口　岡山縣　小林　鳴子
弱虫が酒の勢借りて來て　同　同　同
新米の方が一枚上でした　同　同　同
出しやばりも居てスムーズにはこはれる　同　同　同
鱈腹に喰つて政治に疎く居る　吳市　松永四季無
税務所に赤字あつさり否認され　同　同　同
唇を重ね悲劇の第一歩　同　同　同
犯人も第一声は見栄をきり　今治市　長野　文庫
紅一点啞じあないかと思はれる　同　同　同
絶対に文学は嫌母の意地　大阪府　青柳扇子仙
唯々諾々しかし無視する腹で居る　同　同　同
なぜ何故とわけを尋ねる子に雲雀　同　同　同
日曜は誰がきめたかよい日なり　荒尾市　山崎青粒子
泥んこに醉痴れる程女墮ち　同　同　同
恋だろか洗濯物を引受ける　同　浅川　桑南
けなしてた女と結婚すると云ふ　同　同　同
自轉車に寄る年波を教へられ　和歌山　同　同
駅員が掃くその中へ乘遅れ　同　同　同
叱られた方はちつとも忘れてず　同　同　同
何も言わぬと下積のまんま死に　八代市　西野斗四翁

宝くじ運がないので氣が軽い　同
ラブレターペンもあちらの物らしい　同
割勘と言へど女房承知ひず　愛知縣　津川　竹坊
ふところぬくし割勘合点だ　同　同　同
寒声をとつても鐘が一つ鳴り　同　同　同
今日一と日手紙を書いて暮したり　石川縣　那谷　光郎
後姿のよさを廻つて驚いた　同　同　同
電話口娘笑ふてよう言はず　同　同　同
父の職ついで生涯あやまたづ　愛媛縣　田村　孤峰
東風に欠航のまゝ昏れる　同　同　同
櫻活けせめての春を町の医者　大阪市　東　喜久堂
花嫁の欠点見のがさず目と目と目　同　同　同
嫁く仕度稼いでる間に嫁き遅れ　同　同　同
病床から子の学習へ口を出し　佐賀縣　中村　魚灯
人混みを分けて花嫁振り向かず　同　同　同
ラブシーンを見だとも言はず寢て了い　岡山縣　岡田　夜潮
母しばしラジオへ笑ひ取戻し　同　同　同
総入歯膳に置かれて寒うなり　岡山市　大倉　四案
もてる身の物足らぬこと数ありて　同　同　同
春の雪解けて流れて家鴨浮き　同　藤岡　鰐三
再犯は母の涙に眼を外らし　岡山市　同　同
兒の前に親父一個の玩具なり　同　同　同
候補者が物言いたげにこちを向き　同　同　同
正直なそろばんに又腹が立ち　米子市　同　同
瞬間に掛値が言へぬのが悲し　同　同　同
滯納と金比羅参りは別でして　同　山本　葉光
嗅ぎ分けるように盲人ものを言ひ　大阪市　同　同
女とは好きを嫌ひと言ふ日あり　同　同　同
親切で無慾で言ひたい事を言ひ　丸亀市　馬場　浪二
極楽をおしへる僧の瞳が好きで　同　同　同
なぐさめてくれる他人を淋しがり　同　同　同
出会した恩師に地位を尋ねられ　同　同　同

豆秋＝良い柳画ですね。漫画が川柳の挿絵であつたり、川柳が漫画の註釈であつたりするのでは、あまり月並過ぎて藝術性がない様ですね。

晴鑒＝日本画に対して賛が画の説明でなく、かもし出す一つの雰囲氣を形作る文句である如く、川柳と漫画と言うものが結ばれるやうな姿に於て鈎鐘と檀木の如く、マッチ箱とマッチ棒の如く、其処に完全にマッチする処に本当の藝術の発火点があれば、誰にでも共感を呼ぶ一つの美しい姿として表れるものと思います。

鮎美＝大分漫画と川柳がイコールされて來ました。川柳雜誌社の昭和廿四年の二月の例会が、住吉の一遍寺でありました時に、席題に「漫画」が出ました。その時の句の中で主だつたものをあげてみます。

漫画だけのぞく應接間の雜誌　紫香
当選の顔を漫画家追つかける　万樂
ある時は首相漫画の主役で居　文蝶
漫画ではメガネばかりの人にされ　紀山

路郎＝要するに川柳家も漫画家も、もつと〳〵勉強しなければならないと言うことになるでしょう。川柳漫画にしても立派な絵の描けることも條件としたいし、良い画家でもまづい川柳では筆の取り様がないでしょう。

豆秋＝えー、お隣りのストリップも果てて（笑声）大分更けて参りましたので、この辺で打ち切りたいと存じます。皆さんどうも御苦労さんでした。

（梨里筆記）

鞄提げて二人で來れば税ですか　高知　岡本　元馬
冬の日の蠅にこだわるよい生活　同　同　北雷
学藝会母が代つて踊りたし　同　同　松尾
妻の肩たゝいて憩ふ共稼ぎ　出雲市　森山　壯
犬の欠伸ふと憐憫の情がわき　同　同　原　独仙
愛弟子は女性であつて淋しかり　同　同　同
当然の様に女は遅れて來　米子市　小西　忠雄　同　北雷
良妻賢母と云はれるまゝに歳をとり　同　同　同
ポマードもつけず小金を溜めてる　同　同　同
婦人科はモデルとまがほど脱がし　和歌山　秋月　宏方　同　北雷
老骨に鞭打つて恋をまだやめず　同　同　同
山海の珍味をたべてかよわい子　同　同　同
J・A先生
銀髪の俺に続けと紅いタイ　貝塚市　河楊　梵鐘　同　北雷
判事フトわが家のことを考える　同　同　同
ぶらさがるように生れた鴨の頸　貝塚市　多炭　若柳　同　北雷
臨終へ不貞の妻も泣きくづれ　同　同　同
ふと初恋を想ひけり梅を挿しつゝ　同　同　同
ポマードテカ〳〵智性の無きを光らせて　廣島縣　高島　玉兎　同　北雷
日雇に惜しいえくぼを嬲られる　同　同　同
街錄へミセス二号の舌が冴え　同　同　同
お若いが税吏に惜しい面がまえ　熊本縣　岡本　昇月　同　北雷
まゝごとは出しっぱなしで子は寢込み　同　同　同
誘蛾燈みたいにネオン人を吸う　同　同　同
税々と一度は口の先に出し　愛知縣　兼元　冬兒　同　北雷
役得は家計の足しにもなりもせず　同　同　同
借金の二度の言ひわけ旧節期　兵庫縣　赤木　紅山　同　北雷
つまらなかつた努力と自分でも思ひ　同　同　同
置人のマスクは何にか喰べて居り　同　同　同
三ケ日叱らぬ事に努力する　高知市　松下一徹郎　同　北雷
頑固一徹も税には歯が立たず　同　同　同
抜き衣紋おぐしは流石アップして　出雲市　小倉へとち　同　北雷
殘雪にこゝだこゝだと山葵畑　同　同　同

親達の茶話会になるPTA　愛知縣　松尾　北雷
読経の最中目と目で物を言い　同　同　同
ハイヒール新調ですの歩きやう　出雲市　原　独仙
金へんの景氣屑屋の儲けやう　同　同　同
臆病で生涯自轉車にも乘れず　熊本縣　鹿本　実信
乱脈に義母と云ふ名を持て余し　同　同　同
女房をさしをく眞似はしなさるな　宮崎市　野口卯之助
働らけと言はぬばかりの皮肉言ふ　同　同　同
おむつ干す手は中天へよく伸びて　大阪市　長田　塗杖
すき燒の葱だけ喰べて母は無事　同　同　同
栄轉の友へ餞別借りてする　岡山縣　井野　格一　同　北雷
新時代ステップ踏めぬ俺であり　同　同　同
澄みきつた土民の顔の皺深し　長崎市　山崎　夢路　同　北雷
藝術に生きる貧しさ指五本　同　同　同
遠慮がちそれでも痛いとこをつき　倉敷市　野田素身郎　同　北雷
キッスなんかいつでもあげる腕をくみ　同　同　同
木枯へテーベの窓は明けたまゝ　大牟田　新谷　風浪　同　北雷
おしやべりはよせと見合の注意され　同　同　同
もらわれた子と知る母の五十の子　大阪市　佐野　牛歩　同　北雷
もう一人病人の居るお通夜して　同　同　同
幼な兒の積木に似てる家計なり　萩市　多田　穂波　同　北雷
冗談も知らず育つた片田舎　同　同　同
氣分よい日がおうような患者にし　豊中市　井上　直郎　同　北雷
安靜を苦しいものにする若さ　同　同　同
夫には未練も無いが子へ戻り　貝塚市　東　初奈里　同　北雷
事務を執る足もステプ踏んでる娘　同　同　同
病上り谷崎が好き蘆花がすき　熊本市　瀬口　安彦　同　北雷
華やかな思ひ出がある琴の爪　同　同　同
うぐいすを飼うて警官親しまれ　米子市　辻　白溪子　同　北雷
母のいるとこ慥かめて子は遊び　同　同　同
日曜日ブラン倒れで雨となり　出雲市　石橋　斉兆　同　北雷
レッテルで取り引きされる世の中か　同　同　同

田に底のある話

田に底のある話その他

吉田水車

田に底のある話

戦争の被災都市近くの郊外の田んぼのそこかしこに、ポッカリと口を開けた池のようなものになつて居る爆弾の跡を見られる事と思うが、名古屋附近にも此狀態の所が方々にある。直径三メートル位から、大は五六メートルにも及ぶかと思はれる之れ等の池は――詳しくは穴は――素人考えからすると、直ぐにも別な土を持つて來て埋めればよかりそうに思へてならないが、話によると田にはやはり底があつてそいつが抜けたらいくら埋めてももう元の通りには直らず、從つて再使用は不可能であるとの事である。さればこそ終戦後六年の今日依然として放つて置かれるいわれが判つた。

狸公汽車ををくらす話

名古屋に着いた貨物列車に、どこからどう混れ込んだか、一匹の狸公が無賃乘事をきめ込んでゐるのを、逆にタヌキ寢入りの駅員に発見されて、テンヤワンヤの末やつと捉られたものゝ、おかげで列車は十五分発事がおくれた。此狸公余程人間くさい奴と見えて、木の葉にもならず、ましてや人間への変化も出來なかつたが、数人の大の男を慌てさせ、時間の正確な点で世界的な日本の鉄道ををくれさせたのが、狸仲間へ

馬鹿らしい事金かして不和となり　大阪市　横田　方眠
損得は云はん面子の問題よ　和歌山　同　岡崎　泰三
割勘之写眞代をば書き忘れ　同　照屋ひろし
今去んだお客がボテで批評され　兵庫縣　同　吉原　紅月
永のうをしまふ明るい声になり　鹿児島　西　華水
姉妹のこんなに違ふ幸不幸　兵庫縣　同　田中　敬貢
当もない恋占をする留守居　岡山縣　同　三木　秀雄
厄拂いなどと神主儲うける氣　大阪市　同　平岩　作州
辞めて知るあの役得のなつかしさ　大阪府　同　森本黒天子
晩酌へPTAの寄附がくる　岡山縣　同　大塚美能留
話づきが世話をしすぎてきらわれる　岡山縣　同　大塚五厘棒
春になりやペットの恋は忘れられ　大阪市　同　河島　露外
税ほどに國に厄介かけて居ず　大阪市　同　靜岡ちか子
人民のラヂオぢゃモスクワ聞き取れや　岡山市　同　岡村　秋甜
受付へ良人を呼んでと小さい声　同　坂井　三葉
狂言の電話へ刑事おどらされ　同　奥村　文柳
氣が付いて居たが実行せぬ丈だ　同
会計をまかした嫁へ不足が出　熊本縣　橋本　幸男
金借りた家の子供はあなどれず　同　同
生前の附合いだけの御香典　鳴門市　藤井　明朗
女剣げきその強いこと強いこと　同
恋に生き要る丈けほしい金も盗り　大阪市　梶本　梅香
子の服は買はず競馬にすつちまい　岡山縣　東京都　久家代仕男
月末は受話機はづして炬燵にる　出雲市　柳原三多楼
早起きの隣は自由労働者　愛媛縣　辻　鉢水
早起きをする程くらしよくならず　昊市　門前　哲也
不似合なコンビにロマンスカーの揺れ　昊市　中谷葉栄子
ステージを下り人の子の母となり　大阪市　佐藤　清
振り返る眼を意識した歩き様　大阪市　山本　信陽
再婚の話しに無邪氣な子の瞳　和歌山　田和みのる
同じ女吹雪くホームに今日も立ち　廣島縣　山田　季贅
網棚のカバン忘れた頃に落ち　奈良縣　平井　良兒
汽車の窓昔住んでた村も見え　昊市　林野しずを
冗談にキッスしてよが実現し　出雲市　原　一月
花一輪生けて春待つ女事務　島根縣　石川日出夫
さんざめく料亭新春の儲けやう　同　池田　古心
上京の夢はミソカの風に揺れ　東京都　重田　峰秀
濱職は公約外で実行し　出雲市　小鳥すてを
麦一寸一寸だけの暖かさ　愛媛縣　淋しさが写眞ブックの妻見つけ　今冶市
食盛りばかり抱へて羨やまれ　昊市　三十年紙一枚で首になり　大阪市
ABC何思つてか習い出し　昊市　ストライク春の空氣を破りたり　布施市
手土産でおだてる術を妻は知り　大阪市　十円の御世辞番台おいでやす　大阪市
餅の音聞いて忙しくなる勝手　大阪市　停電の中で昔の苦労聞き　兵庫縣
待ち遠し子の産れるを夢に見て　牧方市　言訳がマダムのカンに引かかり　大阪市
病む友へ会社の話をして帰り　和歌山　見送りの多くて女泣けもせず　兵庫縣
PTA後にあてある会議すむ　廣島縣　生活のたしにと送る子の爲替　貝塚市
もらい子の顔に涙の思慕ひかる　奈良縣　酒飲みの娘飲めない人へ嫁き　兵庫縣
ストーヴはくすぶるだけのセリーグ　昊市　もう一寸色氣の慾しい妻の脚　兵庫縣
ロマンスカー出雲大社の鳥居見え　出雲市

供米の美談もなくて完納し　出雲市
大久保と言はれ喜ぶ親を持ち　岡山縣
未亡人猫の恋にも氣をつかい　山口縣
旅立つた夫の膳へ子をすえる　大阪府
淋しさが写眞ブックの妻見つけ　今冶市
三十年紙一枚で首になり　大阪市
ストライク春の空氣を破りたり　布施市
十円の御世辞番台おいでやす　大阪市
停電の中で昔の苦労聞き　兵庫縣
言訳がマダムのカンに引かかり　大阪市
見送りの多くて女泣けもせず　兵庫縣
生活のたしにと送る子の爲替　貝塚市
酒飲みの娘飲めない人へ嫁き　兵庫縣
もう一寸色氣の慾しい妻の脚　兵庫縣

のせめてもの手柄とでも言うのであろう。

歴史はくり返へす話

先づ今年の服裝の流行は、男の服はダブダブのズボンがどうやら細目になり、女の羽織も膝から上に止まると言うのは、宇野千代女史の御発案とかである。むかしはセーラーパンツに、靴の先きをかくす程なのが、ダンディボーイのみだしなみと言つてゐたもので、それ程ではないにしても、腰から下はゆつくり目の方が一般の流行であるが、パッチのようなズボンになると、さしづめ座敷での行儀に大分神経を費はねばなるまい。

ネオンの無い方がきれいな話

比所電力危機で不急不要の電灯がパーチされた。街のネオンが第一搶玉にあげられた。所でネオンのない都会なんて、およそ意味ないと思つて居たら、却つて眼が樂で何んだか街が——灯火管制とは違うから——きれいに見えて來たような氣がする。陳腐な言葉だが、ネオンがないと文化でないと言ばんばかりに、我れも〳〵とネオン上ネオンをなすあの夜のケンソウ、幸いな事にネオンは無音だからよいものの、あれでなにか音を発するとしたら、流石ネオン好きの都会人も音をあげるに違いない。

詠史川柳

にっぽん (7)

戸田古方

封建社會 (2)

（十一）建武中興（一三三四）

承久の変の失敗にこりず元寇以後の弱体化した幕府覆滅を企図しそれに成功したのが建武中興だが、時流に盲目な公家は施政を誤り、武家の要望は足利幕府の創設をなさしめ、改革の本通よりとりのこされる。

鎌倉をスパイして來て無礼講
眉墨のこと考えている悲劇
尊氏がきらいで勤王家といわれ
この辺でよいなと思う花の御所

（十二）南北朝（一四世紀）

南北朝を吉野朝といつたのは昔のこと、事実上二人の天皇の時代だが日本の國家というより社会は北の方中心があつた。南朝も吉野を中心として南部近畿を占領することによつて、輸血路を確保し、五十余年の命脈を保つ。

三種の神器疑物であろがなかろうが
四海波静かを庶民として願い
歴史家とみやげもの屋で吉野山
何もかも忘れて咲いている櫻

（十三）大名（一四―五世紀）

鎌倉時代の武士は領主の部下の域を脱しなかつたが、建武中興以後著るしく公家が弱体化したので、領主の地位にとつてかわり大名田主より大名となり、全くの武家時代に入る。

大廣間地割がすめば灯がともり
猿楽に倦きたまわぬが王にきず
定紋をめつたやたらにつけたが
り

（十四）足利幕府（創立一三三八）

鎌倉幕府程單純に武士の集結を望むことが出來ない。公家という敵がいなくなつたからでもあらうが、又その公家との交渉のため、公家を押えるためにも政府を京都におかねばならず、山紫水明に中毒される自縄自縛もあつたのである。

有職故実武士には少し詣みづら
き
鴨川を渡るものゝふ花かざし

（十五）對明交通（一四―五世紀）

足利幕府は足利尊氏のすぐれた政治性によつて出発したが、その裏づけには元寇以來の國の赤字を是正する経済活動があつた。対明交通は驚くべき富を我國にもたらした。天竜寺船が天竜寺を作つたのもその一つであり、本格的対外文化の輸入がはじまる。

スリルスリル折れて曲つてくる
儲け
貿易制限おどし文句も美辞麗句

（十六）倭寇と勘合符（一五―六世紀）

儲かる反面、相手國は入超。資本主義以前にはそういう矛盾も有り勝ち、密貿易が武装を余儀なくされる。政府対政府は「日」と「本」の底本を各そなへちんまりと制限貿易をつゞける。

赤ふんどし烽火の方へなびく旗
倭寇絵巻撃退されたところまで
腰取も鬚も毛剃に似た男
江南の春に倭寇の詩も生れ

（十七）庭園（一二世紀）

美しい自然の中に住みなれると、その自然を独占したくなる。平安京に林泉の美を求めて作られた寢殿の池園は大睦のえいきようをうけて、石庭と変り、枯山水という形式を生む。西芳寺、銀閣寺、竜安寺などはその遺産である。

寺男のかいせつ学にちとはづれ
きまぐれに出來たようにも見え
る庭
石にも池にも妙な名前をつけた
がり

（十八）下剋上（一五―六世紀）

利口な太郎冠者と阿呆な大名、じつと狂言をみているとにじみ出る下剋上、大名が段々ロボット化した姿もおもしろくみられる。下の下なるものとして庶民が浮び上る、それは生産力の漸増に起因する。

きつしよだけ殿様にする太郎冠
者
にぎにぎに氣づく大名哀れすぎ
しあわせは裕然としてなめられ
る

（十九）土倉酒屋（一五―六世紀）

生産漸増による牧益は有能な商人の手に蓄積しられてそれが高利貸資本となる、それを利用するのは貧しい庶民と武士階級、剣の力も及ばぬ金の力、徳政となり百姓一揆となり、中世の混乱はその極に達する。

御用金又か又かと思へども
娘はこちらと女衒ひかえたり
身供でも拵者でもよし利子は利
子
おいて去た太刀に曇りがみつけ
られ
借りた奴寒々通る倉の前

（二十）座（一三―六世紀）

生産者商人は自分等の力が自覚されるにつれて協同の利益を考へ、多くは有力な社寺の神人となつてその保護をうけ、自らを守つた、それが座である。彼等は自治的な統制によつて共存共栄を考へる。座の名は今日もいろいろのところに残つているが座商人がその言葉のはじめらしい。

儲かりまつせに社家も頸をたて
にふり
あさんどの力おみそれいたすま
い
取立の礼僧兵へ心附

麻生路郎著　水武書房版

好評噴々

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して敎むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版　二一二頁　定價一〇〇円　送費金十二円

取次御注文は　大阪市吉住局區内方代西五丁目二五　振替口座大阪七五〇五〇

川柳雜誌社

將軍娘（四）

山路閑古

（四）

私は間もなく尋常小学を卒へ、続いて高等小学に進んだ。十三の時に父が死んだので、学業を中途で停め、直ぐに静岡縣廳の給仕となつた。最初は給仕で勤めてゐたが、頻りに拔擢され、やがて十年も勤続する頃には、雇書記から判任属となり、学歴の無い者にはもうそれが出世の止りであつた。

問題の父の所有地は、父の死後最早私の自由であつた。私はこの土地を慶喜邸に買上げて貰ひ、父の死を機会に、年來の紛擾をこの際解決して置かうと思つた。然るに慶喜邸にはこの頃漸く帰京の問題が起り、最早土地も不用であつたと見え、交渉には應じられなかつた。但し遺族は不愍であるとて、却つて金一封を惠まれ、厚く弔問せられた。このことはやがて、御屋敷では必ずしも土地のことに蟠りを持つてゐるのではないことを、それとなく示されたやうにも解釈されたので、私はほつとした。

私は家屋敷を適宜処分して、別に小さな家を借りて母と共に引き移り、そこで十年の月日を経過した訳であつた。今は多少の貯へもあり、人並の出世もして、親一人、子一人、暮しには何の不自由もない。平凡ではあるけれども、このまゝ土となつても悔いるところのない、満足な、平和な生活を続けて居つたのである。

この様に一方的にのみ事を記して行くと、人の一生は随筆的な、極めてあつさりしたものになつてしまふやうである。又これと同じやうな事件が他方にあり、それが兩々対立して交渉を持たない場合も、やはり事柄は簡單で、随筆は單に量を増すだけのことでしかない。

つら〳〵世上の有様を見るのに、それは伸び行く麻畑のやうなものであらう。人事は生ひ茂つて鬱蒼たる叢をなしても、その一本一本が直きこと麻のごとくであれば、麻畑の秩序は常に美しく保たれてゐる。それが世の中といふものではあるまいか。

けれども、その中に唯一本の蓬が交つて、周囲の麻に絡みつく時、其処にロマンを生じ、小説的人生が持ち上る。譬へては悪いけれども、せつ子姫は実にこの蓬であつた。私はこの後に於いて殺人罪に問はれるに至るのであるけれども、私自身けつして悪人でも何でもない。幼時以來直きこと一本の麻の樹であつたといふことを記憶して頂きたい。又この小説が何を表はし、何処に落ち着くか、大体見通しをつけて読むといふことが読者にとつても安易と思はれるから、その意味を以つて、結末を予め記して置くのである。

その頃私は思ひ掛けない手紙を受け取つた。差出人はせつ子姫であつた。彼の姫がどうして私に手紙をよこすに至つたかは、その手紙の内容が委細を物語るであらう。手紙にはかう書いてあつた。

あまり突然で驚かれるかも知れないが、この四月十七日、小妹事主人と共に当地久能山に参拜し、大東館に宿泊することになつてゐます。時刻は追つてその折知らせるから、御許には、それとなく静岡駅へ御迎ひ下さいませ。

御許がどんなになられたか一目見たく、御許にも今のこの小妹の姿を御見せしたく、唯それだけの目的で、この音信を通じます。但し、恐らく御会ひしても一語も言葉を交はすことはないでせう。このことは予め含んでゐて頂きます。会釈も目くばせもなりません。

重れ〴〵御許はこの手紙の不躾なのに驚かれたことでせう。その驚きもさることながら、御許の情の薄さも宛ら思はれ、小妹にとつては悲しいことです。何故同じ驚きを小妹には與へては下さいませぬ。小妹こそは御許の不意のおたよりをどんなにか待ち焦れてゐましたものを。小妹は今日まで御許のことを、屢々も思つて居りました。いゝえ〴〵忘れることもなく思ひつめて居りました。

十一の年、始めて御許に御目に掛りました。御許はもう御忘れでせうか。あの浅間神社の玉垣の外で、互ひによしなき言ひ合ひをしたことを。

その時から小妹はひそかに御許が好きでした。御許が好きと人に云ふさへ恥づかしい思ひでした。好きなものを人はいかなる時に恥づかしがるか、唯々女の氣持を察し給へ。三つ子の魂とやら、その氣持は今も拭はれず、年と共に深さ増すやうにさへ思はれます。

十三の年上京し、十八の時今の主人と結婚しました。結婚後は却つて自由が利く身となり、主人と共に好むところへ屢々旅行することが出來るやうになりました。四月十七日の久能山の先祖の祭典にも、毎年必ず参拜して居ります。その折は大東館に宿泊し、翌日は主人と共に俥を連れて浅間神社に参拜します。又帰りに廻り道して、もとの屋敷のあたりを通り過ぎることもありました。

御許の家の前をもよぎり、もしやとよそながら覗いて過ぎる。その折の小妹の氣持は、何と形容してよろしいやら、右の眼はなつかしさに輝き、左の眼は悲しさに曇り、樂しくはあれど、忽ちあわれも感じ、幾度か事上で手巾を濡しました。

御許の姿は一目たりとも見ることは出來ませんでした。（姫はその後私が家屋敷を人手に渡して立ち退いたことを知らなかつたものらしい）

御承知の通り、旧邸は去年焼失して、おのあたりを通り過ぎる口実も今は無くなりました。その口惜しさに加へて、主人が近く郷里の本邸に引籠ることになり、小妹もとも〳〵北陸に赴かればなりません。

主人は元來病身で、公私の御役にも立たず、小妹も物憂さに垂れこめて社交界にも出ることはなく、いつそ田舎で暮した方が健康のためにもよかろうと、医者のすゝめ、旧藩家中の要望もあつて、郷里引退は今は時日の問題となりました。恐らく今後は東京の土を踏むことはありますまい。静岡の土地もまた永久の別れとなりませう。

小妹は今日まで御許の面影のみ胸に抱いて暮して來ました。年に一度御許の住む近くまで行かれることを、七夕の星になぞらへ、儚ない喜びとしてゐました。しかし、二星のやうに、晴れた空に語うふは難く、まして枕を並べて御許と夫婦の愛をちぎるなど、思ひも寄らぬこと故、子供の折からあきらめてはゐました。

或時御許は荷車の上、小妹は馬車に乘つてゐました。小妹は御許の荷車に乘り移りたいと、どんなに願つたことでせう。羽があれば飛んでも移りたく、心もよぢれるばかり焦れました。

けれども鳥となつて御許の荷車に移れない限り、共に定められた運命の轍をどうすることも出來ません。そのことを思うて、小妹は人知れず涙をこぼし、御許に添ふことをあきらめたのです。

とは云へ、心中に慕ふことは小妹の心まかせです。いかなる運命も障ることは出來ません。かく吾と吾が心を励ましつゝ、年に一度の七夕の逢瀬を、せめてもの心の支へとして、今日まで過して來ました。

今はその心の支へさへ取り拂はれようとして居り、せめて御許の姿を一目見て、今生の別れを告げたく、無鉄ながら御許の事情を探つて、住所の変つてゐたことも始めて知りました。さてしもあらぬ人の情薄さよ。腹立たしや。あゝこの拙い手紙さもなくて何で書きませう。せめて〳〵こたびの約束は果し給へ。あら〳〵かしく。いかれるせつ。

感情の激したところで、ぶつりと筆がとめてある。私にとつては驚くべき程巧みな文章で、又驚くべき程美しい筆蹟で書かれてあるのだつた。しかし、あまりにロマンチックに、巧みに記されてゐるので、何となく実感にそぐはないやうな氣もした。第一私は姫のことをそれ程には思つてゐない。思ひ寄る筋でもないので、何時とはなしに忘れてゐたのである。それを薄情と云はれるのは是非もないが、さういふ目で見れば、いよいよこの手紙は空々しく思はれるのであつた。

その日になると、大東館といふ旅館から使の者がたづねて來て、その時刻など知らせて呉れた。私は袴をはき、鳥打をかぶり、ステッキをついて、判任属の五分も際かさぬなりで、駅まで出掛けて行つた。指定の場所は貴賓室の入口であつた。

間もなく目と鼻の間にある駅前のその旅館から、二台の人力車が走り出して來た。数名の伴の者が徒歩で、風呂敷包や鞄を持つて、その後からついて來る。

人力車から最初に下りたのは、新聞雑誌の写眞でも顔の知られてゐる侯爵であつた。侯爵は和装で鼠色のソフトを被り、同じ鼠色のインバネスを着てゐた。蒼白い顔に金縁の眼鏡をかけ、見るからに弱弱しい身体つきであつた。年の頃は三十にもなろうか、ともあれ立派な貴公子であつた。

続いて車を下りたのは侯爵夫人であつた。これは丸髷姿で、上品な水色の手柄をかけ、年よりは地味な作りであつた。

知らぬ顔をしてゐる筈であつたが、私は目の前を過ぎて行く侯爵に対して、判任属として極めて自然に帽子を脱いだ。上院に議席を持つ侯爵は、勅任を以つて待遇されてゐたからである。すると夫人は小走りに馳せ寄つて、背の君に何か呟き、侯爵は私の方をちらりと振返つて、ソフトに手をかけた。恐らく旧幕臣の者が見送りに來てゐるとでも告げられにものであらう。

それだけのことだつた。

私は侯爵の方に專ら氣をとられてゐたので夫人にはあまり注意をとゞめなかつた唯後姿を見送つたのみで、侯爵の脊に比べるとその高髷だけが抽んでて聳え、まことに似つかはしい御夫婦のやうに思はれ、その幸福を祈る氣持で一杯であつた。

あたりに見送つてゐた人たちは、侯爵の方は顧みず、專ら夫人にのみ注意をあつめ、何と美しい立派な奥様であらう。あれは何処の御方であらうか。よもや唯人ではあるまいなど、口々に褒め呟いてゐた。その呟きを聞くにつけ、それならばもつとよく見て置けばよかつたと、残り惜しいやうな氣もするのだつた。つんと鼻の高い横顔が僅かに印象に残つたが、それは幼時の面影の記憶が混入したものかも知れなかつた。

それにしても、あまりにも冷々として、又淡々として、手紙に記されたやうな、あの焼けつくばかりのロマンチシズムは何処から出て來るのか、全く不思議のやうであつた。（未完）

不朽洞の喫煙室

云いたい事を云ふ　ジーベう
（順着到）

○

須崎豆秋

不朽洞のうた

月が出た出た月が出た
不朽洞から月が出た
あんまりお月さんでかいので
世界隅々照らすだろ

句會のうた

一句出た出た一句出た
ギョッとするよな句が出來た
あんまり選者が辛いので
天かと思たら沒だつた

（作曲が間に合ひませんので、当分「炭鉱節」で唄ひましょうか）

○

出雲市　**尼　緑之助**

今秋出雲支部創立二十五周年記念大会を開催する予定、大社參詣かたゞ〳〵出席プランを是非御決定願ひます。

○

20　×　3

水谷鮎美

二十年來の大雪が降つた。昭和五年の節分に私は結婚、当時の新郎新婦はたちまちにして子福者となり、十人家族の円光のなかにゐる。あと二十年経てば私は七十歳に成りこの世に居るかいないかわからない。この調子でゆけば僅か三回の大雪は人生を呑んでしまふとも謂へる。

円光の手垢にすべる珠数となり

○

種瓜平

人間の矢ざに地球を制覇するものは、蠅に非ず、鼠にあらず、河童なり。

○

京都　**大鶴喜由**

詠むものによつては三分生活にふれたい俳句と、三分自然にふれたい川柳とがある。生活と自然は深い連りがあるが、川柳と俳句には垣がある。

○

電氣時計大いに狂う

友淵貴山

電氣時計が不良になつた。時計屋へ行けば電氣屋へ行けと言い、電氣屋へ行つたら時計屋へ行つてくれと言ふ。一たいどちらがほんとうでしやうか。狂つた電氣時計を前に停電の驚異と共に私はゆうつだ。

駅の電氣時計が止つたら調整中の紙をはるやうに、私とこの電氣時計はいつ迄もいつ迄も調整中の張紙がはられる事でしやう。

不朽洞会から

▼大森娯句樂氏（岡山縣）は後進の道しるべとして郡内に路郎師の句碑建設を企劃

三月十日の誕生日を卜し備前支部句会を開催、路郎師を迎え、句碑の石の下見を乞い、除幕式は來る四月廿二日午前十一時からの予定であるとのこと▼路郎師は大阪日日新聞二月十九日夕刊の日曜随想に「選挙拒否宣言」を執筆された▼蛭子省二氏（愛媛縣）は「蕗の薹扶養家族の舌の上」の句信を寄せられた▼土井文蝶氏は大阪冷器工業株式会社へ入社され福和橋東詰東南角の同社工場に勤務されることとなつた▼福田山雨楼氏（横浜市）は毎日微熱が続いて容体が思はしくないので、晩帰宅するなり臥床安静されているとのこと、自重をお祈りする▼服部十九平氏（岡山縣）は公用で松山へ出張二月廿七日前田伍健氏を訪ね、氏の案内で森紫苑荘氏を訪問、柳談に楽しい時をすごされたと▼築山快夢起氏（ホノルル）から二月八日のエヤーメールによると「常夏の布哇も只今が一年中の最好季、氣温は朝晩が六十度前後、空はカラリと晴れて微風椰樹にそよぎ丁度故國の十月頃の氣分です」とある。今年は馬哇鳥吟行が企劃され魔花麗氏のブロ編成で、妻君携帯組あり、大分人氣を呼んでいるとのこと▼松江梅里氏はアベノ地下映画名物食道街に灘一とすゞの「大万」を開業、柳人といつても顔が会うので昔の「万よし」を思い出させる店である▼吉田水車氏（名古屋市）は二月廿六日に來阪上六から「大阪へ來てまつ黒いはなをかみ」の句信を寄せられ月末ではあり、所用のため誰にも会わず帰名された▼米田孤舟氏（大阪市）は二月廿二日目出度華燭の典を挙げられた▼太田木声氏（池田市）は二月廿五日に角一ゴム会社を停

本社四月例會

陽春の夕、共に作句三昧に浸りませう。お誘ひ合せの上賑々しく御出席下さい。

日時・四月七日（土）後六時
場所・大宝文化会館
（南区三休橋南詰）

兼題「足音」　麻生路郎選
「灰皿」　橋本緑雨選
「花見」　武部香林選

句数　各題三句
会費五〇円

に挙げられた。協会は超党派のもので事業も柳社的行動をとらないものであると▼川柳不朽洞会総会は二月十一日午後一時から、中島診療院階上集会室で開催、役員選挙A地区選出の理事廿五名（鮎美、生々庵、香林、古方、栞、沒食子、豆秋、白柳子、翠光、文蝶、晴峯、貴山、里十九、紫香、春巣、小松園、瓜平、芦穂、愛論、丹路、玲之介、竹荘、淡舟、水客、万滴）を決定、從來の評議員を廃した。A地区は大阪府とその隣府縣（京都府、兵庫縣、奈良縣、和歌山縣）その他の府縣をB地区、海外をC地区とした夕刻より懇親宴、同二十二日夕刻より新理事により理事会を開き、理事長、副理事長、常任理事を決定（理事長中島生々庵副理事長奥村丹路、武部香林、常任理事水谷鮎美、西尾栞、永田里十九、市場沒食子、須崎豆秋、戸田古方）。三月四日夜、川雑千日前連絡所で常任理事会を開催、改正規約の決定版を淨書、路郎師による推薦理事の発表があつた。

A地区・夢裡、一笑、無鬼、B地区・山雨楼、好郎、水車、八歩、緑之助、久米雄、半休門、抱逸、卜占、C地区・「海外」魔花麗

新会員紹介（三月）

阿形　一杉氏（大阪府）正　貴山氏推薦
坂田　良坊氏（下関市）正
石川　侃流氏（下関市）正
以上半休門氏推薦
大森　苑女氏（岡山縣）正　久米雄氏推薦

役得

西尾栞選

隨行も同じ土産を貰つて來
役得の妻はうつかり口走り
床の間へ派手に役得飾られる
役得の鞄たゝいてゐる自信
役得の宴を重ねた喉の冴え
役得の戻り自動車事故に逢ひ
新米の役得でかい事はせず
役得で出來た樣な太鼓腹
役得も見込まれてゐるベースなり
役得のピースきまえよくふかし
役得で平和号の旅をする
役得はへそくりにする共稼ぎ
役得の品デパートから届き
役得がすぎて左遷の荷を縛り
役得へ若い身空を持ち崩し
役得のもう慣れきつた床柱
役得もなく停年へ手がとどき
役得はチヨイ〳〵午後から居なくなり
親馬鹿が子の役得をふれ廻り
役得の多い方から事務をとり
役得のとう〳〵二号さんが出來
役得のない家計簿へ妻は老け
役得にしては過ぎると思いつゝ
役得の積り威張れるだけ威張り
誰にでもある役得と理解する
魚釣りに行くにも使ふ無賃パス
役得は全然ないと仰言らず
交代で旅行に行ける年度末
役得が出來て思想もチト変り
役得の酒が家庭の不和となり
ケチな役得給食の上をはれ
役得がそろ〳〵身につく太りやう
役得の名刺交換だけで飲み
役得は言はず豪遊だけ語り
役得が自慢の父も一週忌
役得の方が大きい横流し

佳・役得の下手な夫を信じ切り　牛歩
佳・役得のかゞんで這入る銀座裏　山雨楼
佳・お隣りの役得へ妻愚痴があり　芳泉
佳・仲人は役得あるをほのめかし　山太郎
佳・役得へ秘書おそろしい智惠を貸し　玉兎
佳・出張の序に知つた湯の香り　十四郎
佳・戰後派は役得の桁かへてゆき　十字路
佳・役得の小さく母を喜ばせ　葉光
天貧人・役得を事務引継にほのめかし　芳仙
風塵地・役得は言はずサラリーの顔にれ　愛鳩
千代男天・役得の稼いでくれる判をもち　鉄兒
素身郎軸・今だから云ふ役得のひどいこと　栞

十九平　山雨楼
鉄兒　玉兎
茶々　美能留
七面山　翠柳
孤舟　志津
不二　夏六
牛歩　如川
鮎美　旅風
秀雄　陽々
日滿子　柳亭
曉明　卜占
勳　梅香
薺花　四案
貴山　若柳
斗四翁　湖月

赤字

土井文蝶選

飲み過ぎて幹事赤字にちとあわて
赤字の方が多いれんわさやけに云ひ
赤字などとんと氣にせぬ重役で
家計簿の赤字に妻は馴れてゐる
赤字とは知りつつ酒を飲みっぱけ
算盤の珠をはじいて見て赤字
赤字でも笑顔で里の母迎え
赤字とは別に交際派手なこと
氣にかけてゐる間は赤字脈がある
雨垂れが淋し赤字の日が続き
赤字でも裸とまではまだゆかず
出産の赤字を母へ話しとき
税務所え赤字を言いに女やり
赤字ですわと艶々とした頬を撫で
家計簿の赤字を埋めるアルバイト
珍客へ赤字の桁が一つ増へ
前借が続き経理で腰をまげ
二次会で赤字となった年の暮
新婚の赤字優しくいたわられ
赤字でもまだ生きてます食ふてます
ぎり〳〵の暮しが一すけつまづき
一豊の妻が恋しい赤字です
有卦に入る人に赤字を話しすぎ

柳亭　大然
まや　淵年
久平　七面山
雄々　淑郎
哲夫　翠柳
卯之助　四案
桃々　十字路
芳泉　貴山
斗四翁　右郎
路三　夢泉
天貧　石筍
十四郎　若柳
旅風　山雨楼
孤舟　格一
実信　薺花
久米女　五醉
卜占　代仕男
佳・赤字着物は派手になつたま、　扇子仙
佳・税務署へ赤字の表は別に持ち　牛歩
佳・パトロンが赤字を背負う粋な店　正則
佳・社の赤字姿うす〳〵知つてゐる　十九平
佳・女房の赤字は裏がありそうな　夏六
佳・開店の資本に負けたまゝ赤字　芳仙
佳・面目も御座なく赤字申しあげ　茶々
佳・お調子に乘つて赤字にして仕舞い　不二
佳・赤字にも馴れやりくりも馴れた妻　淵年
佳・きっちりと赤字をつけて髭を剃り　ひろし
佳・煙突に登られ会社又赤字　鉄兒
佳・赤字もう子供の貯金までおろし　三葉
人・赤字でもまだ生きてます食ふてます　山雨楼
美能留　薺花
敬貢　日滿子
奇童　陽々
千代男　愛鳩
軸・赤字では言いたい事もう言はず　鮎美
文蝶　茶々
天・悪い智惠ばかり赤字がつけて呉れ　不二
地・家計簿へ火の手が上る子沢山　淵年
人・赤字もう子供の貯金までおろし　草骨
よいではありません。「おっちよこちよい」の選者である。ア　葉光
松園は決して〳〵おっちよこちよい」菊沢小松　三葉
園と読み上げたら、流石の小松　山雨楼
園も顔にもみぢを散らした。小　鉄兒
「おっちよこちよい」菊沢小松　薺花
であつた。又、席題の発表に　日滿子
一隅から「よかろ」と云う大き　陽々
かろ」とが間髪を入れぬ速さだ　愛鳩
つたので、会場は爆笑の渦となつた。「よかろ」は句主の雅号　鮎美
表現の難しさは川柳だけではないなア。　茶々
（S・Z）

或日の句會

貴山が席題「霜」の披講を続けている時のこと「霜の朝社内電話で飲む話」と読みあげると

山銀の瓶

大阪市大淀區長柄
四丁目一番地
山銀株式会社
電話堀川四四七番

一品料理と生そば
グリル芝鶴
上六キヤピトル映画館東三軒目

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

二月例會（本社）

二月三日午後六時
於大宝文化会館

酷寒を物ともせず作句に火花を散らす柳人の意氣こそ眞に壯觀である。開場と同時に続々と入場、常連あり新人あり、岡山より鉄兒氏、滋賀より木人氏の顔も見えて賑やかであつた。本月は作句本位に兼題三題、席題五題の盛り沢山で、初心の方も入選の機会に惠まれ一生懸命作句する。鮎美氏は北海・五厘棒・無名林三氏の句を評され、次で路郎先生起ち、柳話にその豊富なる話材と引例の妙、洋の東西を問はず他に其比を見ず、誠に啓発される所多し現柳界の第一人者たる事の認識を新たにした。兼題、席題、披講に手に汗を握り名句の度毎に拍手と歓声を上げる。かくて本月の不朽洞賞は新川博也氏の手に落ちた。ベストテンに賞品授與の後九時三十分盛会裡に散会。（文蝶）

出席者‖路郎・古方・文蝶・操子・昌男・きさ子・香林・栞・紫香・青丹子・旅風・翠光・木人・敬・政子・芳人・三司・愛論・笛生・沒食子・修三・鮎美・天貧・三平・博也・緑雨・昌子・胡蝶・哲水・方的・常夜灯・生々庵・十字路・鉄兒・淡舟・よかろ・永山・梅志・無人・豆秋・瓜平・春柳・夢裡・貴山・一杉・竹莊・牛歩・志乃布・義芙・花村・扇子仙・恒明・光太郎・柳亭・酔歩・晴峰・野介・亜鈍・貞女・葭乃・梨里

兼題「ポケット」　廊生　路郎選

赤い灯へポケットマネー寂しすぎ　久米女
ポケットに何もなかつた検死体　十九平
ポケットの中見直して旅に立ち　美秋
ポケットの突出し出して梯子酒　貴山
ポケットへまアまアまアまと役人のポケット　豆秋
ポケットの掃除する役引受ける　鮎美
ポケットに両掌をいれて影を踏み　栞
貧相はどのポケットも盛り上り　古方
ポケットの紙幣くちゃくちゃで放出され　操子
ポケットを叩いた人に附いてゆき　きさ子
ポケットへ両手突込み默秘権　芳人
ポケットの煙草へシャゲたなキッス　哲水
ポケットの紙幣は一所に洗われる　晴峰
金詰りポケットにあるタバコの粉　季賛
ポケットのふくらみ女給見のがさず　花村
オーバーのポケット故人の名刺が出　紫香
ポケットの切られ具合に感じ入り　志乃布
ポケットに手をつつこんで子がよぎり　春柳
ポケットのマッチ証拠にとられる　翠光
今日からは失業ポケット整理する　恒明
選のつき刑事のポケットだつたのか　同
春や春ポケットマネーが足らぬなり　愛論
子の土産酔ふたポケットにつぶれてる　同
ポケットに蓋あり給料袋あり　扇子仙
ポケットにかんにんの手を握りしめ　同
追つ馳けて来てポケットへ押込まれ　文蝶
十万円位這入るポケット別に付け　同
手で辞してポケットへ謝礼入れさせる　瓜平
一円のためにポケット総ざらえ　同
ポケットで使い残りの金が鳴り　沒食子
ポケットの紙幣にも汗が滲み通り　同
ひと冬をポケットに穴あけたま　古方
独り者ポケットまでも縫いつけて　旅風
無造作にポケットへ入れる詞求書　路郎

兼題「猫」　須崎　豆秋選

捨てゝ来た猫の憐れが眼に残り　久米女
さかな屋の来たのを猫が先に知り　無鬼
ブギウギの声に似ている猫の恋　扇子仙
雑巾に叱られている猫の足　昌夫
下心あつて猫から手なづける　鉄兒
悶々の情を抱いてる猫に言い　愛論
接吻を猫が見てゐた塀の上　常夜灯
一人居の猫に煙草を吹きかける　晴峰
妾宅の猫ねずみをとつて叱られた　翠光
立上る妻へ猫も鳴いて立ち　緑雨
帰らない猫に戸口を開けておき　旅風
板塀に子猫あげます女文字　芳人
税税に民眠る猫がうらやまし　生々庵
猫にたわむれて返答たよりなし　操子
捨猫の話を泣いて訊く少女　修三
膝の猫綺麗な嘘を聴いてゐる　同
不機嫌な主へ猫もちんまりと　万滴
猫だつて好き嫌いがあるたべこと　同
野良猫の化けて出そうな目が光り　貞女
寒月に訴へて啼く猫の恋　同
包丁で猫をおどして炊事する　竹莊
無心言ふ二号は猫をなでながら　同
捨てられた猫は灰ぎゝつまれる　同
何を見付けたか猫の尾ピンと立ち　十字路
溝れずみ曰く小しゃくな子猫奴が　文蝶
抱きしめる猫に女の姿態をみる　亜鈍
猫なんじ平然として朝帰り　扇子仙
ペルシヤ猫寄い文士だなおもひ　香林
風邪ひいて休めば猫があまえに来　鮎美
片手では猫をなぜてる原稿紙　博也
黒猫の毛並は冬陽吸いつくし　野介
恋すてふ三日も飯を食べぬ猫　豆秋

兼題「小包」　中島生々庵選

小包の中味小さな嘘を書き　美秋
親なればこそ小包の柿つぶれ　若栞
小包は旧正月を送つて来　同
小包を開くに子の顔二つ寄り　淡舟
小包を解いて手品の様に出し　豆秋
小包をさげてさわつてふつてみる　敬
頬づりをした小包を投げこまれ　古方
小包の重さを妻とあてゝ見る　栞
小包の重さで届く親心　翠光
内氣な娘少包にしたプレゼント　鮎美
小包は大阪へ行くくゝりやう　常夜灯
包装の新聞で故郷の雪を知り　瓜平
くゝり癖この小包もたて結び　一杉
洗濯をせよと小包送つて来　木人
玄関に小包秋の香がこぼれ　香林
小包になつて原稿戻つて来　三司
お隣りへ来た小包に印が入り　同
小包と別に効能書が来る　鉄兒
小包の見舞佛へ先づ供へ　同
小包も旅の疲れを見せて着き　きさ子
小包へ下宿の窓は手を上げる　同
小包で足らぬ心を別に書き　操子
お守りを入れて小包出来上り　博也

席題「新禱」　橋本　緑雨選

弱点をつかみ新禱師金にする　恒明
新禱師の思はせぶりな手がうごき　同
御新禱がすんで傳説聞かされる　竹莊
新禱代お心持ちで儲けてゐ　同
新禱師の顔がだん〳〵凄くなり　淡舟
新禱師が氣になる事を言ふて去に　同
御新禱を待つ間不幸を語りあひ　寄丹子
新禱料米一升にして貰ひ　梅志
妻も子も忘れ新禱師痩せほそり　鮎美
新禱に上中下の差別あり　修三
新禱今人間でない声を出し　万滴
御新禱は無論その上百度石　十字路
停電のまんま御新禱続くなり　貴山
新禱師と医者と玄関ですれ違い　沒食子
すぐ治るやうに新禱をすゝめられ　豆秋
よれ〳〵の袴新禱師恥をせず　操子
御新禱の効目も待たず死んでゆき　翠光
新禱師の眞似事をてめしを食い　一杉
御新禱へ母は小さく坐つてゐ　博也
御新禱のあいだ北風吹きまくり　緑雨

席題「坊ちゃん」　市場沒食子選

坊ちゃんの左翼思想が案じられ　鉄兒
前だれを嫌い坊ちゃん勧めに出　同
坊っちゃはんあれでもなか〳〵手に乗らや　扇子仙

ぼんくらのぼんが長じて盛んなり　扇子仙
無軌道え坊ちやんアレはやめなはれ　修三
逢さて見て馬鹿でなかつたお坊つちゃん　旅風
坊ちやんで育つて社長の人の好き　貞女
集金にいて坊ちやんを貰めやし　豆秋
坊ちやんの白足袋氷割つてゐる　鮎美
坊ちやんを呼べば小犬もついてくる　操子
儲つている坊ちやんの毛がちぢれ　一杉
坊ちやんはいつか待人になつてゐる　亜鈍
坊ちやんなどか、わりもない職にゐる　よかろ
平社員なれど坊ちやん自動車で來　香林
坊ちやんと云われボン〳〵おきになり　常夜灯
本心を突かれ坊ちやんギヨツとなり　哲水
坊ちやんを前に並んだ紙芝居　青丹子
坊ちやんの咤られている紙芝居　瓜平
会計を今日も坊ちやんまかせられ　花村
お坊ちやんれと女さからはず　栗
じり貧のまゝ坊ちやんが抜けきらず　古方
ふん〳〵と坊ちゃん氣軽に聞いてくれ　紫香
坊ちやんが語る戦後の不倖せ　酔歩
義理と云ふ仲に坊ちやん小さく生き　竹荘
坊ちゃんだったと思ふ疑獄に連坐して　十字路
坊ちやんの丸さはがゆいまゝに惚れ　万滴
坊ちやんの柔それ〳〵の責あり　浪食子

席題「霜」　友淵　貴山選

霜の朝すゝめるマスク退ける　旅風
どてら着せ添へてあしたはえちい霜　操子
お通夜した眼にさきつい今朝の霜　浪食子
霜の白ラジオは喋る尋ね人　扇子仙
ふしん場をめぐつて今朝の霜柱　一杉
あの年齢になつて毎日霜を踏み　香林
霜の朝今朝も厨の妻の咳　生々庵
霜ばしら不遇の窓に光りゐる　鮎美
霜柱踏んで社全の波に負け　昌夫
霜柱ふめばサクサク夢きえる　晴峰
枕木の霜へ工夫のはづむ息　文蝶
霜のある現場巡査が寒く立ち　紫香
月給になる霜の道よく通ひ　牛歩
霜白くとんとを焚いて子を起し　淡舟
パトロールカーのスリップの跡橋の霜　十字路
霜つけた野菜がついた今朝の市　竹荘
霜の朝社内電話で飲む話　よかろ
つるはしがキラリ工夫へ朝の霜　柳亭
えらい霜百姓一人下肥をくみ　笛生
霜柱科学する子が二三人　青丹子
轢死者の菰に降りたる朝の霜　芳人
トラックの大根霜も放り出し　同
霜柱ふんで故郷の朝痛し　博也
霜柱早出勤の足にくすれたり　同
坂の霜みだして一番バスが來る　胡蝶
霜をみだして夜勤の帰途を急ぐなり　同
貨車一つほつとかれてる霜の朝　栗
霜の朝猫背が通る又通る　同
先生も行儀が悪い霜の朝　永山
霜の朝素足で走る子は吾が子　同
乗越して霜の枕木踏んでいに　亜鈍
霜の朝脚氣が治るというはだし　同
霜の朝歯磨粉がしみている　同
箒目もはつきり霜へつゞく朝　愛論
霜踏んで遍路寂しい影をみせ　同
湯の街へ水菜を運ぶ霜の朝　修三
父さんの靴跡がある朝の霜　鉄兒
霜下りる迄を拍子木鳴りつゞけ　きさ子
義理ではく白足袋霜の朝を出る　万滴
いつの世の勤めはつらい霜柱　豆秋
父だけが霜ふんで出るとこに住み　古方
霜の朝悔ない朝の歯を磨く　三司
霜の道徹夜の足をすべらせる　瓜平
枕木の霜は都会へ続くなり　貴山

席題「胸ぐら」　阿万　万滴選

灯を消せば胸ぐらをとつてよゝと泣く　鮎美
深呼吸した胸ぐらをとる不惑　同
胸ぐらに取りつく程に惚れてゐる　生々庵
胸ぐらは取つても結局泣き崩れ　同
胸ぐらをつかまれて、も良い氣嫌　青丹子
胸ぐらをつかんで友情强ひられる　同
胸ぐらをあつさり渡す悔悟の日　香林
胸ぐらをとつて自嘲が込み上げる　同
胸ぐらを斯うと被害者鼻血の手　十字路
胸ぐらをつかまれてから思ひ出し　三平
じようだんに取る胸ぐらもちこわし　古方
胸ぐらをとる代議士は写される　哲水
自信ある微笑胸ぐらとらせとき　浪食子
無抵抗主義で胸ぐらとられてる　扇子仙
胸ぐらをとつて焼酎くさい息　豆秋
胸ぐらへ廻つたらしいしやくな蚤　笛生
胸ぐらをとるに脂粉の香漂よはせ　栗
肌ぐらへドンと來いよと初稽古　博也
胸ぐらで酒のげつぷを吸はされる　紫香
胸ぐらをとられて言訳つまるなり　淡舟
酒臭いのが胸ぐらへ搦んでき　鉄兒
胸ぐらをとつて突出すコツプ酒　常夜灯
拂わない腹で胸ぐらとらせてる　瓜平
胸ぐらは離せ釦が取れるがな　文蝶
胸ぐらが裂けた拍子に出る十字架　古方
胸ぐらとればまさもにゲツプ浴せられ　万滴

席題「名案」　福島　鉄兒選

名案のげせぬ部長のもどかしく　瓜平
名案は知らず算盤だけは知り　同
名案もなく影ふんで帰る月夜　扇子仙
名案であるが闇会計ではね　同
名案に賛成したが金がいり　常夜灯
名案浮ばず散歩は足が冷えただけ　万滴
名案出ずず結局妻にまかせて出　同
同案があり下役が認められ　柳亭
名案に又同意して飲みに行き　同
名案は良いが予算をつい忘れ　文蝶
名案を妻にも言はず宵寢する　同
名案もなしドン底に生きてゐる　博也
名案はありませんかと坐が白らけ　豆秋
名案もなく焼芋屋を初め　香林
名案でないが暫定措置とする　芳人
盃の上で名案ゆれてゐる　哲水
名案も浮ばず手形の期日が來　志乃布
電話ではいへぬ名案あるといふ　梅志
氣の弱い人で名案持つてゐた　笛生
名案もなく金策へ靴をはき　夢裡
名案あとは炭坑節になり　三司
名案だされどお金はどうします　貴山
名案がうつらうつらと夢の中　豆秋
名案は膝をたゝいて立上り　翠光
名案の何処か一本釘はづれ　野介
煙草アカ〳〵吾に名案ある構へ　十字路
名案は人の懐あてにして　花村
名案が浮かんだ下駄の音になり　紫香
名案は埃の上で文字をかき　春柳
名案は思はず膝をポンと打ち　淡舟
名案は女房をだます事ばかり　酔歩
幹事名案ちよつぴりハラをきつてゐる　鮎美
名案はドアを蹴つて持つてくる　瓜平
名案は満場一致呑む話　常夜灯
名案を末席に居て出しそびれ　栗
名案の取らぬ狸が酔つてゐる　無人
老へて見ると名案金が要り　豆秋
名案も浮ばぬまゝの逮捕狀　十字路
名案は極秘とあつて耳を借り　翠光
名案えオツチヨコチヨイが口を出し　文蝶

東京そばと
灘一とすじ
大阪の新宿
アベノ橋地下映画食堂街
梅里の店
大萬
柳人の憩ひと連絡場所に
（大阪駅から地下鉄で十五分。地方柳人には旅館の斡旋も致します。）

山燒川柳大會（2）（奈良縣）

記事及び兼題「山燒」「奈良の街」「五重の塔」「注連縄」は前号に発表

兼題「猿沢の池」　藤生　葭乃選

猿沢の池でフイルムの一を撮り　春集
猿沢の池でいっぱし列を解き　仙居
もう一度池へ戻ろう春日道　花王
日帰りの奈良猿沢で早い晝食　信二
猿沢の池の深さにふれもせず　貴山
猿沢で待つ間の恋へ麩が足らず　香林
猿沢の池は逆さに塔を見せ　三司
猿沢でとつぶり暮れた鐘を聞き　水客
猿沢を一廻りして春日道　眉水
スナップ屋猿沢池に鹿と待ち　草々
猿沢の池のほとりの三味も良し　伸生
猿沢の池を名残りに奈良を去る　敏夫
振り出しのように猿沢池へ來る　迷宮
猿沢の鯉入れ変りたちかわり　失名
猿沢の池他所者が手を洗ひ　白柳子
猿沢の池で神鹿引き返し　貴山
猿沢の氷お百度見て詣り　春集
猿沢の池から塔を撮りなほし　旅風
猿沢池で開が入り　小松園
猿沢の池で案内人をきめ　登美坊
猿沢の池でどっちへ廻らうか　蘭華
猿沢の池振り出しに奈良日誌　文女
猿沢の池から車夫がしゃべり出し　春集
猿沢へ采女の氣にもなつて立ち　葭乃

兼題「土産」　上田　翠光選

團体をはなれて一人土産買ふ　良祐
土産もの子の仲良しへ買ひ足され　默平
髪結も土産をねだる遠出髷　白眼子
土産物帰れば足が折れてゐる　木魚
仰山なお土産ハハン求職か　二五
買つてから土産がせかす帰り道　不文女
お土産の折を交番へ忘れて來　哲水五
豪勢な應接土産出しそびれ　愛論
子煩悩らしく土産をぶらドげる　芦穂
三條小鍛冶宗近ナイフ出して見せ　夢裡
行かぬ先からもうお土産に氣をつかひ　水客
網棚の土産で判る奈良帰り　旅風
冷やかもの果ての土産に飴を買ひ　瓜平
くれた人の情のしみる土産もの　白香
とつおいつ土産とう〳〵買ひそびれ　夢裡
土産屋へどや〳〵と來てあはてさせ　沒食子
酔うてゐる連れの土産も提げさ・れ　豆秋
音のする土産ころ〳〵箱で鳴り　春集
女房への土産は旅の汚れもの　十九平
ちょつぴりは土産話に嘘もまぜ　同
頼まれた土産に金が足らぬなり　小松園
土産買ふ金は確かに別に入れ　同
包裝は立派であつた土産物　十九平
終電車土産の鹿と共にゆれ　文蝶
年寄りの土産帰つてからにする　蘭華
土産物子にふところを見透かされ　鉄兒
宴会をコツソリぬけて買ふ土産　竹拍
天平の瓦を買うて土産にし　香林
ことづげる土産きれいな恋が待ち　正貴
おみやげのうにで一本余計呑み　千舟
一人宛あるお土産の値をきかれ　九葉
お土産を待ちくたびれて寢てしまひ　夕鐘
手土産の見栄ほどほどに帰省する　郁三
よそにない土産の味で儲けて居　蘇堂
上六で奈良の土産を買うていに　路三
鳴らしもつて帰る弟への土産　花王
れんれこへ見せる土産は音をたて　逸人
アベックで行く手土産の鹿がゆれ　兎子
土産物携げて大佛仰いでゐ　扇子仙
虚礼とはいうが手ぶらで帰られず　齊花
土産屋へだけ來たような子沢山　鉄兒
五・アリバイを示す土産を忘れて來　白眼子
五・せつかちの土産は汽車の窓で買ひ　正治
五・食ひ方を知らず土産を持てあまし　竹莊
五・土産物老母には別の甘いもの　笛生
五・土産物買ふのに配る指を折り　仙居
信二
凡々
鮎美
つとむ選
斗四翁
郁三
十起夫
信二五
日満子五・雑踏をそれて芝生でき く話　喜山
眞珠洞五・ネンネコが鹿と遊んで居る芝生　修三
秋翠五・二人居て只それだけでよい芝生　まさる
ふど彌五・笑はして芝生轉げる夏密柑　芦穂
銀々人・妻として來れば芝生にもう座せず　小松園
古方地・花が散る芝生の上の貸むしろ　沒食子
ひろし天・ロマンスの芝生へ生き抜くさらえ持ち　修三
笛生軸・姉妹に別な想い出ある芝生　つとむ
柏月
万滴
香林
白香
貴山
愛論
貴山
瓜平
十九平
好美
金鹿
ひろし
芦穂
小松園
竹柏
鮎美
喜山
凡々
齊花
千舟
仙居
文女
操子
芝生に寢た夫へ日傘ひろげおく　花王
ワイシャツになつて芝生の手入れする　葉光
もう芝が伸びてるダグウッドの日曜　考萃
杉抜けて芝生春日の風が來る　兎子
芝生から続く名所も右左　同
三遊間球は芝生を白く縫ひ　正貴
芝生とはきれいな夢を生むところ　同
仰向けば妻のうつむく春芝生　正則
萌える芝若い世代は歌が好き　喜山
成金の庭に芝生の趣味も出來　修三
わけもなく古都の芝生に寢ころがり　まさる
泣きに出た芝生淋しく暮れかかり　芦穂
雰囲氣を逃げて芝生の冷えを知り　小松園
もの想ふ芝生白雲またよぎり　沒食子
銀杏の葉七分はおちている芝生　修三
美しい素足と芝生思ふなり　つとむ
芝生もうすつかり冬の色をみせ　斗四翁
ロケーション芝生で甘いことを見せ　郁三
春の芝生にコロ〳〵ゴルフの球の艶　十起夫
藤影が月見の景になる芝生　信二
枯芝の中でみつけた蓮草　五
きつちりと紙屑入れのある芝生　凡々
芝生をば踏む幸福な靴と靴　鮎美
どこからかボールが飛で來た芝生　喜山
語らずに居れば芝生へ蝶も來る　凡々
恋のあと芝生の草が寢てゐます　齊花
対角線芝生の上についてゐる　千舟
春の風芝生をそつとなでてゆき　仙居
偽善者の涙と知つている芝生　文女
初恋の芝生の起伏好ましき　操子
テキサスになつて芝生は怨まれる　
泥靴の掃除に芝生通りぬけ　
プローチが芝生に落ちてゐたふたり　
鹿の糞よけて芝生の加工壽司　
待つていたように芝生は光つてる　
アベックの長居に芝生むしられる　
ホームラン外野の芝生ゴロで抜き　
此処がよし芝生へおろす魔法瓶　
伽藍あと見せて芝生の生きてゐる　
つゝましく芝生にくすす靴の紐　

兼題「神鹿」　高橋　月南選

平和への望み春日の鹿も殖え　文女
鹿にまでサラリーマンと見くびられ　豆秋
ありあまる餌へ神鹿眼をつむり　小松園
神鹿をなづけスナップ待つてゐる　竹莊
鹿の顔ひろげて奈良の案内書　正治
神鹿にお叩頭をされた加工壽司　修三
新婚のポーズに仔鹿興を添え　斗四翁
神鹿の或日は柵に身を凭たせ　蘇堂
この人も奈良か土産は鹿を下げ　愛論
旗日だなと神鹿人の列を見る　銀江
神鹿の笛古色に富んだ響きよう　福助
神鹿へ煎餅が足らぬうれしい日　由布
アベックへ鹿惡びれず道をかえ　万滴
新婚の思ひ出にある奈良の鹿　春集
紙くずへもう退屈な鹿の鼻　ふじ彌
社務所の子鹿と一緒によく遊び　竹莊
すねる子へ神鹿不思議そうに居り　成行
鹿と杉奈良の朝日を浴びてよし　凡々
鼻頭撫でれば神鹿のつぶらな眼　瓜平
神鹿もアブレの委にソッポ向け　佐和
神鹿のいわれも訊いて宿を出る　敏夫

神鹿へ今日童心に返る父　藤代
綾方、鹿と遊んだ事ばかり　逸人
神鹿にカメラの位置が定まらず　迷宮
よう來たと鹿が首ふる春日道　紫風
神鹿の餌を子供にせがまれる　路三
古老から聞く神鹿の盛衰記　郁三
うたゝ寢が覚めれば鹿の顔があり　勇剣
五・神苑の鹿畑に來て追ひやられ　眞珠洞
五・陸じいところは神鹿あきらめる　瓜平
五・エキストラの様に写眞師神鹿寄せる　まさる
五・産制もなく神鹿はふえて行き　卜占
五・鹿のくせ知って写眞師奈良に住み　蘭華
人・神主の子鹿といつしよに育てられ　竹荘
地・神鹿が背なから覗く加工壽司　仙居
天・遠足の列神鹿に絶ち切られ　正貴
軸・神鹿とあってお辞儀教へられ　月南
（以下次号）

川雑　**大阪南支部句會**（大阪市）
二月十四日　於　阿倍王子神社

逆立・斜陽・渦・街の灯・欲情・野良犬

逆立ちになっても出ない無い強さ　牛歩
逆立をする鼻先に春匂ふ　酔歩
逆立をしてもたりない生活し向き　春柳
逆立をすれば犬まで逃げて行き　無人
逆立をすれば女はたじろかず　翠夢
逆立はたゝみ根よく蹴ったゞけ　一杉
夢多く意見はいつもさかだちし　晴峯
税務署は逆立せよとは言はぬけど　四案
逆立で飯が喰へてる旅廻り　文蝶
ふとん敵く母へ逆立ち邪魔をする　茶々
親と子の逆立つ曲馬あわれなり　野介
諸と言へばもう逆立もし兼ねない　一杉
逆立ちをしても鼻血も出ぬ会社　路郎
逆立ちをして孤独たのしむ　同
斜陽とか称しスターで儲けてゐ　沐天
白々と斜陽山茶花だけ残し　貞女
あきらめた奏斜陽を受けて立ち　無人
土蔵だけ斜陽の中にポツネンと　豆秋
陽は斜めクーポンのパン喰みつつ歩く　葉平
斜陽キラ〳〵たらひの水のうつくしき　春柳
牛と人と斜陽の中へ馳けくらべ　七面山
脂粉にも馴れて落目のバーに生き　晴峯
嘘一つ夕陽の中のおんなの瞳　宣介
默して語らず斜陽に坐す夕餐　亜鈍
野らじまい牛は斜陽を尻にうけ　春柳
斜陽いまピアノ弾く手にすき透り　野介
いつか自分も渦中の人となっている　葉平
問題の渦中に矢張り女が居　忠美
雪溶けの小川の春の渦が舞い　娯句樂
二つある渦をリーセントで隠し　牛歩
お上りさんラッシュの渦にうろたえる　四案
ラストバンドへ愛欲の渦が巻き　七面山
コーヒーの砂糖がとけてからの渦　一杉
北浜の渦にもまれている亡者　豆秋
渦の如旋風の如恋は炎え　晴峰
渦一つっけてパーマの流行りさか　満年
一尾は湖心の渦を通りぬけ　香林
雑踏の渦にひとゝき身をゆだね　愛論
渦一つ残して犬のお葬式　晴峯
渦をかく火箸の先の話しぶり　英美子
指先の渦を信じて疑がわず　文蝶
街の灯に骨透けている街の処女　天國
街の灯をくゞれば熱きものす　静夢
街の灯のとゞかぬとこで酔ひつぶれ　文蝶
街の灯へ粉雪はゴマのように降り　亜鈍
罪人となっても街の灯捨て切れず　愛論
街の灯へ胸を叩いて火の警句　沐天
街の灯に結核の咳重々し　天國
街の灯へ糸切れのした靴をはき　春柳
欲情をそらす藝者の手の運び　英美子
トラビストさて欲情の捨て切れず　愛論
欲情のひま〳〵女餅を切り　一杉
欲情をおさへ猫撫で声を出し　豆秋
欲情を見抜いて三味の音を締める　野介
欲情に負けまいとする膝硬し　静夢
欲情を裏切る酔となりにけり　文蝶
欲情と知って女は堕ちて行き　貞女
金で買う欲情軽くあしらはれ　酔歩
欲情を抑へて昊れた空財布　無人
かゝる欲情に我を失ひたりし　葉平
欲情が神の力を跳ね返し　豆秋
酔ひどれの顔を野良犬なめにくる　英美子
好きすきがあり野良犬の兒を宿し　豆秋
野良犬よ俺もお前も宿命だ　無人
野良犬へ法は容赦なく迫り　沐天
野良犬へ孤兒すり寄って日向ぼこ　貞女
午前二時野良犬に似る行狀記　愛論

川雑　**出雲支部句會**（出雲市）
一月二十日　於　出雲市公会堂
小倉へとち報

ム・君と共に

強い・兎・寒月・無理・クリー　太朗
強い風なり直線の唸り立て　肚
正しさによし雑草であろうとも　岬月
山狩りへ兎も獲れず飲んでいる　代仕男
賣っちゃいゃ兎へ地團駄踏んで泣き　太朗
運命に逆はず兎ちぢこまり　緑之助
追放の身のアンゴラに夢のせて　太朗
寒月へうがいの音も身にしみて　緑之助
寒月がぎっさり節を開かせられ　太朗
炭がまの縮こまってる月寒し　へとち
御互に相手が無理に見える暮　同
御無心を通す積りの座りやう　雲平
無理もない話へ御茶を入れ替へる　緑之助
クリームの匂ひほのかにさゝやかれ　同
つ・まくクリーム丈けの寒化粧　代仕男
クリームを不老薬ほど大事がり　岬月
クリームのせいにしている顔の荒れ　雲平
クリームのにほう老妻とはなりぬ　一如
天國に結ぶとははてなし君とゆく　緑之助
君行けば行く愛情がある許り　太朗
緑之助

川雑　**竹原支部句會**（廣島縣）
二月八日　於　福岡葉留路居
黒本　芳泉報

招待・養生・水溜り・鶯

招待狀惜しいけれども勘めの身　風來男
招かれて刻々せまるかくし藝　あきら
下心ある招待の派手なこと　芳郎
養生をして下さいと日の先　富穂
養生のつもりと左遷慰める　葉留路
養生に帰した後で離縁狀　和朗
静臥椅子妻の化粧へ氣を廻し　芳郎
養生の偽ならと云ふ虫も喰へ　愛鳩
自動車來て足に傘さす水溜り　風來男
鶯の鳴く里であり母おわす　可笑
鶯の声に余寒の炬燵出る　芳郎

川雑　**岡山支部句會**（岡山縣）
日展協賛新春川柳大会
一月二十一日　於　天滿屋百貨店
藤本　満年報

傑作・色彩・春風・ゆつくり・無　卜占
邪氣・姉妹・脚線美・家族連れ　虹消
傑作へ画伯まだ〳〵悔いて佇ち　白竜
傑作へ子供の評がいたすぎる　草骨
傑作を遠慮のないのが來てけなし　正一
傑作はたゞこの兒だけこの兒だけ　案山子
色彩ははっきりさせず立候補　卜占
虹消えてからも一色眼に残り　聰夢
色彩はピンクずくめで夜の天使　春栄
春風へ硝子戸を又拭き直し　北星
春風にとけこんでいるサンドマン　昭三

阪田謄写版

大阪市北区芝田町五二

株式会社　阪田商会

電話　福島一九九五番
五三一番
六四番

春の風草だけ萌えた分譲地　卜占
逢いに行く袂へ春の風が来る　九坡
春風が暮の先へもつれて来　瓢々
先生の遺刻ゆっくり門を入る　泰秀
無邪氣さへついさからうて見たくなり　苑女
ウインクさは知らず無邪氣に笑み返し　潤年
妹に学費を貢ぐ化粧やけ　大甲帽
姉妹の愛嬌が呼ぶ喫茶店　忠美
いさかいもなく姉妹老けている　鮎郎
招待へ姉妹同じ柄でくる　北星
姉妹でもう歩かない人が出来　方大
妹の智慧を借りてる姉の恋　鉄兒
淳二の絵にも姉妹好き嫌い　正一
ナイロンの廣告だった脚線美　大甲帽
モンペイを履くにはおしい脚線美　三葉
脚線美墨の上であわれなり　北星
脚線美チトお粗末な靴をはき　鉄兒
汽車賃を暗算してる家族連れ　九坡
おばあさんを先に乗せてる家族連れ　北斗
末っ子をみんなでなだめる家族連れ　四案
家族連れ只見るだけさ決めて行き　格一

川雑　**小郡支部句會**（山口縣）
一月二十八日　長野　井蛙報

福引・晴着・巡査

引換所鉛筆紐が愚痴で去に　一挙
福引へくじ運強い妻をやり　柳虹
景品の酒に禁酒の日が延びる　恒生
景品のバケツは派手な音でくれ　井蛙
当り籤運勢未だ地におちず　九呂平
子の棺へ着せる晴着も焼場まで　井蛙
嬉しい日近く晴着をたゝみかえ　柳虹
踊るように晴着が逃げる駅の水　枯水
猛犬に巡査もしばし入りかれ　一路
不心得論す巡査も人の親　井蛙
ポリまでがボスの味方と知るお茶屋　同
ミスポリス恋を忘れたように立ち　半久門

川雑　**吳支部句會**（吳市）
一月十五日　於吉浦消防團楼上　林野　甦光報

宝・頼る・初め・マフラー・留守番

國宝はつぎ〳〵焼かれ失はれ　梅香
天平の作金網の中に入れ　芳泉
御隠居の機嫁家宝を見せたがり　史球
リクリエーション宝探も一つ組み　高馬
頼る子もなくて老後の金を貯め　十進
頼りない返事新聞読んでゐる　史球
頼る身を頼られて居る不仕合せ　基之
東京へ頼つて行けば二階借り　紅兒
羅針盤に頼り切つてる夜の海　甦光
初恋が破れてからの酒煙草　紅兒
マフラーがカラーの汚れ隠してる　葛峰
マフラーが無い淋しさは襟を立て　愁洞
留守番が要領を得てあっけなし　岡香里
久し振り留守で済まない客があり　天來
上役の留守ストーヴが派手に燃え　彩菱
妻の留守茶椀の数のありつたけ　彩菱

川雑　**弓削支部句會**（岡山縣）
一月六日　於金光教神殿　福島　鉄兒報

年玉・餅・日の出・寒がり・心易い

外孫にこっそりとやるお年玉　久米女
一年の計へ年玉貯金する　野人
年玉は十円札でもの足らず　竜兒
幾山河越えて國からお年玉　潤年
滞納を子には知らさぬお年玉　牛歩
年玉を母へ贈れば母あわて　同
グローブを買うには足らぬお年玉　笑泉
お芽出度うが云えて貰つたお年玉　一貫
一たんは母に預けるお年玉　茶々
餅搗に餐子は杵を持つて待ち　喜多八
未帰還の隣の餅も搗いてやり　巷雨
御利益の順にお鏡供へてゐ　同
餅の数孫に扱かれて悦に入る　野人
お雑煮の残りは母が引受ける　茶々
餅搗を逃げて雑煮を十二食い　潤年
新婚の二人待つてる里の餅　喜多八
春風へ割れるに任す鏡餅　牛歩
初日の出子が眞つ先に声を上げ　桃々
日の出にはお目にかゝらぬ日もつゞき　七面山
バラックに過ぎた日の出の軸をかけ　一砂
初日出牛の涎も色をかえ　水甫
父の職ついで日の出を知らぬなり　茶々
日の出から稼いで餐子氣に入らず　久米女
寒むがりへ毛糸のシャツがまだ編めず　笑泉
寒むがりであつた分横へ懐炉入れ　十九平
心易いだけよと女赤くなり　一砂
心安うなつてうわさの種になり　奇童
心易げに肩を叩けば他人なり　游子
心易う云われ不氣味な一人旅　久米女
心易そうに保険屋うるさく来　一貫

川雑　**備前支部句會**（岡山縣）
一月十三日　於久米雄居　苑女報

四十代・金屏風・茶碗

四十代そろ〳〵酒に負ける年　不明
横鬢の白さ氣になる四十代　忠美
四十代悲勿れと神に乞い　八千代
父親に似て来る顔も四十代　苑女
四十代どうにもならぬ世を悟り　東岸子
金屏風晴の初老に立て廻し　寛造
金屏風裏も見られて値ぶみされ　苑女
金屏風土蔵の中で値を踏まれ　娯句樂
借りて来てあまりまぶしい金屏風　寛造
本家だけある金屏風に用が出来　玲花
僕だけの天下となつた金屏風　久米雄
父ちゃんの茶碗末つ子もう覚え　正洲
お茶碗の氣配に腰を上げかける　忠美
茶碗持つ事から行儀仕込まれる　柳風子
お茶碗の破れない墓を淋しがり　苑女
もう一杯ほしいと思う茶碗なり　久米雄
茶碗ごと食うかと見ゆる健かさ　牛仙
子沢山茶碗と箸を持つて待ち　娯句樂

川雑　**姫路支部句会**（姫路市）
孤笑氏母堂追悼句会　於孤笑氏宅
二月十日　夷一笑報

形見・梅・節分

初賞與母へは何を買ふてやろ　燕子
母さんは後でいたぐおすそ分け　笑鬼
それだけで寒くないかと母はいい　同
うつり香も悲しい今日の形見分け　燕子
よく似合ふ従姉の形見着て歩き　和水
形見わけ我に用なきものばかり　一笑
形見わけ母のわかさがしのばれる　孤笑
一と七日形見の羽織染に出し　一笑
さつき泣いた眼の色かへて形見分け　樹甫
一枝の梅ベッドへも春近し　燕子
酔ふて戻つた父さん豆をまかされる　一笑
手に余る枡で初孫豆をまき　燕子
なけなしの金で厄よけ札を買ひ　二葉

川雑 **岡山縣廳支部句會**（岡山市）

一月十三日　於　岡山縣廳内世話課室　服部十九平報

牛乳・負け惜み・後悔・発明・しもやけ・後先・女將・青二才

牛乳の一本は犬にやる生活　茶々
捧られて牛あきらめの顔でいる　満年
牛乳を呑む氣になつた体温器　三葉
捧られる合間に小牛飲んでいる　満年
負け惜みを默つて云わせる勝將棋　案山子
負け惜み急所をつかれむきになり　吉備平
借り着して颯爽と來る負け惜み　茶々
負け惜み手の繃帶のことにふれ　三葉
負け惜みこまかいものがないとい　満年
來客へ早合点の酒を出し　茶々
後悔をしてゐるからと詫びてやり　三葉
後悔をしたが素直に詫びられず　十九平
後悔をさせて法廷畫となり　九坡
発明に遺産つぶしてまだ足らず　びか一
算盤に合はぬ発明忘れられ　聰夢
霜やけをギユツと踏まれた満員車　吉備平
霜やけのことも案じた手紙が來　中山子
しもやけの手で女房酌いでくれ　九坡
朗かな妹先に嫁に行き　茶屋平
後先の見える女房で金が出來　迷窓
諦めて帰つた後へ立つて待ち　同
後先は秘書も知らない電話くる　聰夢
追加分女將が盆へ載せて出る　十九平
客を見て女將料理に手を加え　無聊
威張つてさえ居れば日の立つおえら方　同
青二才故にとつびなことも出來　同
青二才とは思へども敢税吏　紫郎
青二才藝者の酌にかしこまり　夢沙子
青二才マルクス理論でからんで來　十九平

雑川 **岡大支部句會**（岡山市）

一月六日　於　岡大医学部舎監官舎

栄養・掌・感情・ぼたん雪・犬・評判　大森　北星報

病弱が又栄養を口にする　倚子
栄養價問ふて骨まで食はされる　九坡
いかものをホルモン料理の名で食はせ　十九平
栄養を云ふて秋刀魚の日が続き　七面山
掌がたゞごとでない熱と知り　茶々
感情に負けて儲けを又逃し　忠美
感情が少しとぎれて密柑むぐ　聰夢
ぼたん雪舞言紙屑だらけなり　同
ぼたん雪になつて迎がちとおくれ　倚子
裏口へ廻れば同じ犬が居り　風來子
評判もまぜて叱言を聞かされる　九坡
未亡人噂の中へ來たを知り　風來子

日の丸句會（鳥取市）

一月十九日　於　日の丸工場應接室　河村日満子報

予算・浮氣

予算なぞたてゝゆけるか此の時勢　秀和
國会勞頭追加予算可決鳴呼國民よ　柳窓
新婚の家計予算も組んでみる　たかし
勞資協調予算にまでも口を出し　吾柳
軍事費の予算否應なく通し　日満子
予算案では昇給の余地もなし　同
予算では利益百万出すつもり　芳道
交際が家庭予算にひゞを入れ　遊星
浮氣する夫に負けず遊びに出　粗粒
浮氣した罪の報が子にたゝり　益雄
身ごもつて浮氣心とすぐわかり　貴美女
魔がさしたことで浮氣のけりをつけ　日満子
人生のながさ浮氣の二度三度　遊星

南区医師会 **川柳同好會**（大阪市）

一月二十三日　於　河村瑞川居

運命・媚・樂屋

宿命と深夜往診背ずる　一哲
運命をこのチリ鍋に抛り込む　弾正
運命が蠟燭の火にゆれて見え　無名林
運命は元の女中に世話になり　捨舟
轉んでも女媚態を忘れない　同
くやしいが斜陽の妻は媚を賣り　一哲
媚びるだけ媚びてサツサと終電車　弾正
女生徒は早や先生に媚びて見せ　珊枝郎
媚びる事丈をいのちに老妓ふけ　生々庵
立女形樂屋を訪へば女客　捨舟
大部屋で殿様うどん呼ばれてる　生々庵
御ひいきののれんの中のいい男　無名林
大部屋の用事うどん屋頼まれる　同
負けて來て関取むつつりあがせる　生々庵
姫君はピースを喫んで待ちたゝり　無名林

すみれ句會（岡山縣）

一月五日　黒田久米女報

空しく・計りごと・氣の毒・びつくり・空腹

ランデヴへ金策すれば雨が降り　游子
お帰りを待つたに空し白木箱　ラツキー
生きること空しと思ふ日もありぬ　しげ女
計略と知らずに受けたプレゼント　奇童
計りごと妻にもあつた月給日　畝女
其の部屋へ來て計られた事を知り　久米女
おくやみに來て泣き事をきかされる　久女
口先は氣の毒そうな御挨拶　一貫
びつくりをさす声色を使ふてき　笑泉
御愛想にびつくりした振りをしてみせる　十九平
ライバルが息子と知つた慌てよう　七面山
すき腹へ嫌いな酒をしいられる　鉄兒
恋人が帰れば腹が空いてゐた　十九平
空腹をかゝえて愛も恋もなし　桃々

阪神ビル小集（大阪市）

二月四日　水谷　鮎美報

節分・波

節分の外は霰の早春譜　三司
男はひろえぬとこへも豆をまき　春夢草
子に豆をまかせて父はのんでゐる　鮎美
小波へ蟹はこしやくに爪を立て　三司
リル竿の波と闘ひながら釣り　鮎美

紅ぼたん小集（大阪市）

一月五日

指定席

指定席艶には勝てぬめがね持ち　恒明
母さんの肩が老いてる指定席　翻骨
ぼん〳〵のお供で來れる指定席　恒明
指定席前のお客にあてられる　紫朗
指定席あゝ待ち呆け〳〵　愛論
おそがけにパトロンが來る指定席　豆秋

石會根民郎主宰
柳川 しなの
郷土色濃く異色ある
柳誌として定評あり
半年　一五〇円（〒共）
一年　三〇〇円
松本市大名町七一
發行所 しなの川柳社

編輯室にて

★陽春四月号をお送りする。★原稿が輻輳して盛りきれないので本号から増ページして好意に酬いることにした。時節柄増ページどころではないのであるが、一大英断で敢行した。一段と御支援が願いたい。

★金沢の柳友久留美君が「川柳大阪」に「句碑」と題する随筆を寄稿している。筆が僕のことに及んでいるので一寸拔書きして見よう。「八円の郵便切手でいかめしい坪内逍遙の画像を見てゐると、何だか自分も豪くなって見たい氣持になる。同時に未來の切手に川柳人として路郎師の委位が現れてもよいと空想する。否切手に現れるより全國的に句碑の三つも建立されたことは猶一層川柳界として悦ぶべきことかも知れない」「とまれ氏を敬慕する人々によって川柳句碑の生れたことは、私の郷里に秋声や鏡花の碑が現れたこととよりも尚一層うれしい一人なのである」とある。久留美君のこの友情にお答えする材料が又一つ殖えたので誌上で報告することにする。

★來る四月二十二日（日）に私の第四句碑の序幕式が岡山縣和氣郡吉永町福満で執行される。これを機会に多くの柳人たちと顔を合わしたいと思う。★たのみもしないのに句碑が次ぎ〳〵に建つので、私は尻こそばゆい氣がするが私を愛してくれる人たちの一つのあらわれだと思えば有難さに涙がこぼれる。

★一生を文化事業と取ッ組んだ私は、到底金持にはなれそうもないが、段々句碑持になってゆくような氣がする。

★本号はこんな私事で一パイになってしまった。（路郎）

動静

▼本社三日句会は三日午後六時から大宝文化会館で開催され遠來柳人の参会もあり盛会▼川雑南支部句会は三月十四日午後六時から阿倍野王子神社で開催▼大阪逓信病院鳥ケ辻川柳会は三月十七日午後二時から三階図書室で開催▼南区医師会川柳同好会は彈正居で開催▼一路会句会は三月十日午後二時から高島屋飯田株式会社で開催▼川雑備前支部句会は三月十日午後七時から開催▼南浜電鉄川柳会は三月廿三日午後五時半から南浜高等学校階上で開催▼千石荘川柳会（貝塚市）は三月廿五日午後一時から開催、以上何れも路郎主幹出席▼川雑姫路支部では三月下旬塩田温泉え吟行をするとのこと▼川雑下関支部句会は二月十七日下関國鉄職員会館で開催▼川雑備前支部句会は二月十七日久米雄居で開催▼川雑岡山支部句会は二月廿四日弘済会ハウスで開催された▼廣鉄管内鉄道人川柳大会が管理局主催の下に二月廿日廣鉄職員会館で開催された▼川柳園社創立一周年記念川柳会が二月十七日夜松江市寺町竜覚寺奥書院で開催された▼榎本総夢氏を廣島へ送る会（岡山市）が三月四日に満年居で催された▼川柳天守閣二月例会は塚越逍遙亭氏を迎えて十九日に天理教坂町分教会で開催▼中部日本作家協会が三月四日祝創立の句会を開催した各社から役員を出しているので柳社的行動はとらないことになっていると、事務所は名古屋市西区替地町三二▼川柳パトン一号が三月十八日に函館市東雲町十三北村白眼子方川柳野蘭会から発刊された▼大川笑鬼氏（姫路市）は旧冬盲腸で入院され手術後経過良好、幕の二十八日に退院されたと▼富田酔歩氏は殆ケ月滞阪されていたが二月の川雑本社句会に出席後、今治市北新町え帰郷された▼松尾北雷氏（愛知縣）は二ケ月間滞阪、警察学校で再修業の上一月廿九日に帰國された▼武田孤笑氏（姫路市）の母堂きくのさんが一月廿五日に永眠された行年六十一才、謹悼。▼東都川柳作家連合会が結成され一月七日に大会開催、三月三日に大会報が刊行された。事務所は澁谷区景丘町四八落合方▼富田眞顯男氏は愛知縣蟹江局区内蟹江本町両五の一五四へ移居

耳鼻咽喉科
牟田病院
院長 牟田哲三郎（一哲）
大阪市南区長堀橋交叉点西・電話船場五〇〇〇番

最短時間で結ぶ
大阪－名古屋
3時間特急
毎日3往復
座席指定制
特急料金 ¥60
上本町發 7.40 12.40 16.40
名古屋發 8.00 13.00 17.00
近畿日本鉄道

風趣豊かな
おなじみの「食道樂街」七階
◇てんぷら◇とんかつ
◇中華料理◇おでん
◇ビール◇フルーツ
◇ジュース
（外食券食堂）
甘露茶屋「甘樂」開設
お好み食堂
松坂屋
大阪日本橋

Made in Occupied Japan

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第六卷 第四号
一冊 金三〇円（送料三円）
（載轉禁）
牛ケ年概算 金一九八円
一ケ年概算 金三九六円
昭和廿六年三月廿五日印刷
昭和廿六年四月一日発行
大阪市住吉局區内芳代西五丁目二五番地
編輯兼發行印刷人 廓生幸二郎
大阪市住吉局區内芳代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
振替口座 大阪七五〇五〇

募集

課題吟募集

街路樹（十句）福田山雨楼選
クーポン（十句）市場沒食子選（四月廿五日締切）
煙突（十句）高田抱逸選
正直（十句）武部香林選（五月廿五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出來る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。